文部科学省科学技術人材育成費補助事業
ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）
清流の国　輝くギフジョ　支援プロジェクト

# 2018年度
# 事業報告書

国立大学法人 岐阜大学　岐阜薬科大学　岐阜女子大学　アピ株式会社

目次

目次
序文　林 正子 岐阜大学 副学長（多様性人材活力推進担当）／男女共同参画推進室長

1. 実施体制と数値目標・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・3
1-1. 機関長会議
1-2. 連携協議会
1-3. 数値目標

2. 女性研究者の研究力向上のための取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３
2-1. 連携型共同研究助成
2-2. 英語コミュニケーション力向上セミナーおよび英文校閲費用助成
2-3. 研究倫理研修
2-4. 夏季休暇中の学童保育トライアル「カモミールこども大学」
2-5. メンター制度

3. 女性研究者の上位職への積極登用に向けた取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・６９
3-1. トップマネジメントセミナー
3-2. リーダーシップ研修
3-3. 研究補助員配置制度
3-4. 企業インターンシップ

4. 意識啓発のための取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・７９
4-1. フォーラム
4-2. 意識啓発セミナー
4-3. キャリアパス支援講演会およびロールモデル講演会
4-4. ニューズレターの発行

5. その他の特筆すべき取り組み・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・１３７
5-1. サイエンス夢追い人育成プロジェクト（理系女子大学院生による高校生向け出前講義）
5-2. 長良高校研究室見学会
5-3. 各種セミナー・シンポジウム等への参加

# 序文

## 「清流の国 輝くギフジョ 支援プロジェクト」4年目の成果と今後の課題

事業実施責任者
岐阜大学 副学長（多様性人材活力推進担当）
男女共同参画推進室長
林　正子

文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」（2015 年度～2020 年度）「地域循環型女性研究者育成・支援プロジェクト」実施期間後半となった今年度は、自主経費の取り組みとなっての 1 年目でもありました。

2018 年 12 月 10 日（月）には、国立研究開発法人 科学技術振興機構（JST）より山村康子 プログラム主管と今西一憲 主任調査員に岐阜大学にお越しいただき、現段階での事業評価とご助言をいただきました。

女性研究者の研究力向上、上位職登用、意識啓発、それぞれの取り組み、そのほか特筆すべき取り組みについて、岐阜大学、岐阜薬科大学、岐阜女子大学、アピ株式会社、4 機関が緊密に連携し、事業 4 年目で補助金のない状況下、自主経費でも継続して精力的な活動を展開していることを高く評価していただきました。

とくに連携型共同研究については、事業開始後、延べ 36 件の共同研究を助成していることに加え、今年度も 8 件の共同研究を支援していることについて高評価をいただきました。併せて、大型の外部資金獲得や学会賞受賞、特許出願、出版、社会貢献につながった事例などを成果としてアピールできるようにとのご助言もいただきました。また、ニーズの高い研究補助員配置制度についても継続して実施することや、女性の活躍推進につながる岐阜県内のネットワーク拡大に向けて発展的な取り組みを展開するようエールもいただいた次第です。

本編でご紹介していますように、4 機関が協力し合っての特筆すべき成果としては、学童保育「カモミールこども大学」も挙げられますし、ロールモデル講演会をはじめとする各種講演会・研修についても継続して実施しており、構成員の啓発活動において一定の成果を挙げています。しかしながら、現時点では、女性研究者在職比率の数値目標が未達となっており、引き続き、女性研究者の採用･昇任に向けた実効性のあるポジティブ･アクションの実施が求められています。

事業期間残すところ 2 年間、従来の連携力をより強化し、実効性のある対策によって所期の目標を達成することができますよう、鋭意取り組みを進めてまいります。4 機関の構成員の皆様はじめ、関係の方々のご支援、ご協力、今後ともどうぞよろしくお願い申し上げます。

## 1. 実施体制と数値目標

### 1-1. 機関長会議

各機関長が参加して事業実施計画の確認、進捗状況の共有、計画の修正等の重要事項について協議する機関長会議について、第6回を2018（平成30）年3月30日（金）に、第7回を2018（平成30）年10月15日（月）に、第8回を2019（平成31）年3月26日（火）にそれぞれ開催した。

議事は以下のとおりである。

---

第６回　　2018（平成 30）年 3 月 30 日（金）　10 時 00 分～10 時 55 分

（１）平成２９年度事業報告について

林連携協議会議長から、資料１に基づき、連携型共同研究プロジェクト支援、英語セミナー・英文校閲、地域定着型女性研究者インターンシップ、研究補助員配置制度等各機関で成果のあった取り組みについて報告があった。

また、補助事業経費では実施していないが、次世代育成の観点から岐阜大学では、サイエンス夢追い人育成プロジェクトを継続実施していることも実績として事業報告している旨報告があった。

稲垣学長から、岐阜薬科大学大学院生も岐阜市の要請により、小・中学校へ授業を行う等指導に出向いており、プレゼン能力やモチベーションの向上に繋がっている事例があるためアピールしていきたい旨発言があった。

（２）中間評価結果について

林連携協議会議長から、資料２に基づき、中間評価結果について岐阜大学において、女性研究者在職比率、女性教授比率の目標が未達であることからｂ評価となり、取組、取組の成果、実施体制、今後の進め方についてはａ評価で総合評価はＡ評価であった旨説明があった。

なお、直近では岐阜女子大学以外の３機関は、女性研究者在職比率の目標が未達である旨説明があった。

また、平成２７年度連携型で採択された５大学中岐阜大学も含め４大学は総合評価Ａであり、１大学は総合評価Ｂであった旨報告があり、設置主体が異なる４機関の連携がうまくいっていることから評価されたのではないかとの意見があった。

さらに、６年間の補助事業期間のうち平成３０年度から３年間は自主経費により自立的運営を促進していく必要があり、引き続き４機関が連携して事業を実施することを確認した。

（３）平成３０年度事業計画について

林連携協議会議長から、資料３に基づき、平成３０年度事業計画書について報告があり、自主

経費の予算の範囲内でこれまでの事業を継続し、４機関で分担して担当する事業についても事業計画表のとおり実施することとした。

稲垣学長から、岐阜薬科大学では女性研究者在職比率は厳しい状況になっている旨発言があった。女性研究者の採用実数や女性研究者在職比率に直接反映できなくても連携して取り組んだ取り組みや波及効果等をしっかりアピールすることも重要であることを共有した。

また、野々垣社長から、インターンシップ先の拡大をするためには、これまでの事業の取り組みを４機関にとどまらず他大学や企業にも連携先として広げていくことも重要であり、大学・企業への情報発信も必要である旨発言があった。

---

**第７回**　2018（平成 30）年 10 月 15 日（月）　13 時 30 分～14 時 20 分

（１）平成３０年度事業実施状況について

林連携協議会議長から、資料１－１に基づき事業計画書について改めて説明があり、資料１－２に基づき第２四半期までの実施報告があった。次に、本期間内に実施した夏季休暇中の学童保育について各機関へ謝辞があり、「かもみーる通信」が１００号を達成した旨報告があった。また、１１月２日に開催予定のフォーラムについて協力依頼があった。

稲垣委員から、学童保育と本事業の関連性について質問があり、林連携協議会議長から、子どもの親に対する支援として実施している旨説明があった。なお、時間帯を終業時刻後までにできないか、受入者数を増やせないか等の意見があり、次回に向けての課題とする旨の説明があった。

野々垣委員から、女性研究者に関する数値目標達成状況について、採用比率は良いが、特に上位職の比率については、女性社員のみを上位職に登用することができないため比率はなかなか上げられない旨説明があった。稲垣委員から、女性教員の辞職に伴う後任の採用が男性教員となり、女性研究者在職比率がますます厳しくなっていることから、目標を達成できない場合のペナルティーについて質問があった。林連携協議会議長から、補助金の返戻は無いが、岐阜女子大学以外の３機関は女性研究者在職比率の目標が未達であり、次の補助金申請等において減額等採択に影響する可能性がある旨の説明があり、訪問調査の際に確認する旨の発言があった。

次いで、野々垣委員から、インターンシップ受入れ先の拡大について、学生の受入れはやりやすいが、女性研究者に絞った受入れは難しいため難渋している旨の発言があった。

（２）ＪＳＴ訪問調査について

林連携協議会議長から、１２月１０日(月)午後に実施予定である旨報告及び協力依頼があった。

（３）平成３１年度事業計画について

林連携協議会議長から、資料２に基づき、平成３１年度事業計画書について報告があった。自主経費の予算の範囲内で事業を継続し、４機関で分担して担当する事業についても事業計画表

のとおり実施することとした。

---

**第８回**　2019（平成 31）年 3 月 26 日（火）13 時 30 分～14 時 15 分

（１）平成３０年度事業実施状況について

林副学長（連携協議会議長）から、資料１－１に基づき、今年度の事業実施報告があった。また、資料１－２の女性研究者の数値目標達成状況について、在職比率が未達成と説明があり、目標達成に向けて協力依頼があった。次いで、例年作成している事業報告書について、各機関へ校正依頼があった。なお、今年度から経費削減の観点から製本は行わずデータ及び必要数のみプリントアウトした冊子を関係機関に配付する旨説明があった。

続いて、事業報告書の共同研究成果報告会部分について、特許等、一般公表不可の内容が含まれていることについて、荒木委員から、将来、セミナーを担当する講師から事業報告書を見せて欲しい旨依頼があった場合、見せて良いかどうか質問があり、意見交換の結果、一般公開可能な形として再構成することとした。

次に、林副学長から、成果報告会について一般公表不可の共同研究課題を報道取材不可としているが、新聞社より取材可否の報告が混在していることに対し取材しづらいと意見が寄せられたため、来年度以降は取材の可否に応じて時間帯を区切る等の対応を検討することとした旨報告があった。

（２）ＪＳＴ訪問調査結果について

林副学長から、資料２に基づき、１２月１０日（月）午後に実施した JST による訪問調査結果について報告があり、女性在職比率等、数値目標の達成を目指す方針について再確認した。

（３）平成３１年度事業計画について

林副学長から、資料３に基づき、平成３１年度事業計画書について報告があった。自主経費の予算の範囲内で事業を継続し、４機関で分担して担当する事業についても事業計画表のとおり実施することとした。

## 1-2. 連携協議会

4 機関から委員が集まり、2018 年度は計 8 回の連携協議会を開催した。
議事（審議事項および報告事項）は以下のとおりである。

---

第 36 回　　2018（平成 30）年 4 月 26 日（木）

1　2018 年度事業計画について
2　機関長会議（3 月 30 日）の報告
3　2017 年度実績報告書等の提出について
4　研究補助員配置制度実施状況（各機関）
5　共同研究助成について

---

第 37 回　　2018（平成 30）年 5 月 24 日（木）

1　2018 年度連携型共同研究助成採択について
2　夏季休業期間学童保育の実施について
3　フォーラム（11 月 2 日）について【岐阜大学】
4　行事予定について

---

第 38 回　　2018（平成 30）年 6 月 28 日（木）

1　夏季休業期間学童保育の実施について
2　フォーラム（11 月 2 日）について【岐阜大学】
3　トップマネジメントセミナー（8 月 1 日）について【アピ株式会社】

---

第 39 回　　2018（平成 30）年 7 月 4 日（水）　※メール会議

1　2018 年度連携型共同研究助成採択について【岐阜女子大学】

---

第 40 回　　2018（平成 30）年 9 月 27 日（木）

1　次年度の事業計画について
2　トップマネジメントセミナー（8 月 1 日）報告【アピ株式会社】
3　夏季休業期間学童保育の報告
4　研究倫理研修（9 月 13 日）報告【岐阜女子大学】
5　研究倫理研修（9 月 19 日）報告【アピ株式会社】

---

第 41 回　　2018（平成 30）年 10 月 25 日（木）

1　2018 年度連携型共同研究成果報告会（2 月 26 日）について
2　フォーラムについて
3　機関長会議（10 月 15 日）報告
4　次年度の事業計画について
5　2018 年度・第 2 期研究補助員配置制度（岐阜大学）の結果について
6　ロールモデル講演会（10 月 9 日）報告【岐阜薬科大学】

---

第 42 回　2019（平成 31）年 1 月 31 日（木）

1　2018 年度連携型共同研究成果報告会（2 月 26 日）について
2　2019 年度連携型共同研究助成募集要項（案）について
3　フォーラム（11 月 2 日）報告【岐阜大学】
4　JST 訪問調査（12 月 10 日）について
5　機関長会議（3 月 26 日）について
6　次年度の事業計画および行事予定について
7　リーダーシップ研修（10 月 26 日）報告【岐阜薬科大学】
8　意識啓発セミナー（12 月 20 日）報告【岐阜薬科大学】
9　インターンシップ（12 月 11 日、12 月 25 日、1 月 8 日）報告【アピ株式会社】
10　ハートフルフェスタ 2019（岐阜市）パネル展示（1/21~1/27）報告【岐阜大学】

---

第 43 回　2019（平成 31）年 2 月 26 日（木）

1　2019 年度連携型共同研究助成審査スケジュールについて
2　機関長会議（3 月 26 日）議題について
3　キャリアパス講演会（2 月 1 日）報告【岐阜薬科大学】
4　英語コミュニケーション力向上セミナー（2 月 7 日）報告【岐阜薬科大学】
5　意識啓発セミナー（2 月 20 日）報告【アピ株式会社】
6　全国ダイバーシティネットワーク組織東海・北陸ブロック会議（2 月 4 日）報告【岐阜大学】
7　全国ダイバーシティネットワーク組織・大阪大学シンポジウム（2 月 7 日）報告【岐阜大学】

---

## 1-3　数値目標

4機関

| | 1年度目 | | 2年度目 | | 3年度目 | | 4 年度目 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績<br>（3月1日現在） |
| 女性研究者採用比率 | 30.9%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当28.6%、助教相当33.3%、研究員60%） | 29.2%<br>（教授相当20.8%、准教授・講師相当22.7%、助教相当30.9%、研究員55.6%） | 31.3%<br>（教授相当1.1%、准教授・講師相当33.3%、助教相当37.9%、研究員60%） | 34.0%<br>（教授相当14.3%、准教授・講師相当47.1%、助教相当28.0%、研究員61.5%） | 30.9%<br>（教授相当18.2%、准教授・講師相当30.8%、助教相当35.7%、研究員60%） | 31.9%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当27.6%、助教相当31.7%、研究員50.0%） | 34.8%<br>（教授相当19%、准教授・講師相当38.5%、助教相当42.9%、研究員50%） | 25.5%<br>（教授相当10.0%、准教授・講師相当22.7%、助教相当20.0%、研究員76.9%） |
| 女性研究者在職比率 | 21.2%<br>（教授相当11.1%、准教授・講師相当19%、助教相当31.8%、研究員47.3%） | 21.8%<br>（教授相当11.7%、准教授・講師相当20.2%、助教相当30.7%、研究員53.8%） | 22.1%<br>（教授相当1.4%、准教授・講師相当19.6%、助教相当33.5%、研究員48.3%） | 22.4%<br>（教授相当11.1%、准教授・講師相当21.7%、助教相当31.4%、研究員53.6%） | 22.7%<br>（教授相当11.9%、准教授・講師相当20.2%、助教相当34%、研究員48.3%） | 22.3%<br>（教授相当11.2%、准教授・講師相当22.4%、助教相当29.3%、研究員54.0%） | 23.6%<br>（教授相当12.4%、准教授・講師相当21.3%、助教相当35.3%、研究員48.4%） | 22.3%<br>（教授相当12.3%、准教授・講師相当20.9%、助教相当27.8%、研究員60.0%） |
| 女性研究者上位職比率 | 15.0%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当18.5%、教授相当11.1%、准教授・講師相当19%） | 16.0%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当20.0%、教授相当11.8%、准教授・講師相当20.2%） | 15.4%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当18.5%、教授相当11.4%、准教授・講師相当19.6%） | 16.2%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当20.0%、教授相当11.1%、准教授・講師相当21.6%） | 16.1%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当22.2%、教授相当11.9%、准教授・講師相当20.2%） | 16.8%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当20.0%、教授相当11.2%、准教授・講師相当22.4%） | 16.9%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当22.2%、教授相当12.4%、准教授・講師相当21.3%） | 18.7%<br>（学長相当33.3%、副学長・理事相当18.8%、教授相当13.1%、准教授・講師相当22.1%） |

岐阜大学

| | 1年度目 | | 2年度目 | | 3年度目 | | 4年度目 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績<br>（3月1日現在） |
| 女性研究者採用比率 | 24.2%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当20%、助教相当28.9%、研究員0%） | 25.0%<br>（教授相当22.7%、准教授・講師相当14.3%、助教相当30.7%、研究員0%） | 25.9%<br>（教授相当11.8%、准教授・講師相当27.3%、助教相当34.6%、研究員0%） | 20.0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当20.0%、助教相当24.4%、研究員0%） | 28.1%<br>（教授相当15%、准教授・講師相当36.4%、助教相当34.6%、研究員0%） | 26.7%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当22.2%、助教相当31.0%、研究員0%） | 30.4%<br>（教授相当15.8%、准教授・講師相当36.4%、助教相当38.5%、研究員0%） | 15.2%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当18.8%、助教相当17.6%、研究員0%） |
| 女性研究者在職比率 | 16.3%<br>（教授相当9.6%、准教授・講師相当14%、助教相当27.1%、研究員50%） | 16.8%<br>（教授相当10.1%、准教授・講師相当14.1%、助教相当27.8%、研究員50%） | 17.2%<br>（教授相当10%、准教授・講師相当15.1%、助教相当28.4%、研究員50%） | 16.8%<br>（教授相当9.2%、准教授・講師相当14.9%、助教相当27.7%、研究員50.0%） | 17.8%<br>（教授相当10.3%、准教授・講師相当15.8%、助教相当29.3%、研究員50%） | 16.9%<br>（教授相当9.3%、准教授・講師相当16.8%、助教相当25.8%、研究員50.0%） | 18.5%<br>（教授相当10.7%、准教授・講師相当16.8%、助教相当30.2%、研究員50%） | 16.3%<br>（教授相当9.5%、准教授・講師相当16.4%、助教相当23.7%、研究員0%） |
| 女性研究者上位職比率 | 11.8%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当12.5%、教授相当9.6%、准教授・講師相当14%） | 12.1%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当12.5%、教授相当10.1%、准教授・講師相当14.2%） | 12.5%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当12.5%、教授相当10%、准教授・講師相当15.1%） | 11.9%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当14.3%、教授相当9.2%、准教授・講師相当14.8%） | 13.2%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当25%、教授相当10.3%、准教授・講師相当15.8%） | 13.0%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当14.3%、教授相当9.3%、准教授・講師相当16.8%） | 13.9%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当25%、教授相当10.7%、准教授・講師相当16.8%） | 16.6%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当14.3%、教授相当10.6%、准教授・講師相当19.9%） |

連携4機関の中で最も厳しい状況に直面しているのが、代表機関である岐阜大学である。初年度は目標値を達成できたものの、2年度目以降はほとんどの項目で目標値を下回っている。2017年度（3年度目）の初めに「教育研究院」を設置したことで、これまで各学部で行われていた人事が一本化された。これを機に女性教員の採用および上位職登用を加速させ、事業終了までに目標値を達成することが喫緊の課題である。他方で、工学部では「多様な人材参画推進室」が発足し、各部局内でも女性活用推進の動きが出てきている。本事業の取り組みがより一層部局ごとに浸透することにより、トップからの取り組みと部局内における取り組みの相乗効果が発揮されることが期待できる。

岐阜薬科大学

| | 1年度目 | | 2年度目 | | 3年度目 | | 4年度目 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績<br>（3月1日現在） |
| 女性研究者採用比率 | 0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当0%、研究員0%） | 14.3%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当50.0%、助教相当0%、研究員0%） | 50.0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当50%、研究員0%） | 66.7%<br>（教授相当100.%、准教授・講師相当50.0%、助教相当66.7%、研究員0%） | 33.3%<br>（教授相当100%、准教授・講師相当0%、助教相当0%、研究員0%） | 0%<br>（教授相当0%、准教授･講師相当0％、助教相当0%、研究員0%） | 66.7%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当100%、助教相当100%、研究員0%） | 16.7%<br>（教授相当0%、准教授･講師相当0%、助教相当33.3%、研究員0%） |
| 女性研究者在職比率 | 13.0%<br>（教授相当11.5%、准教授・講師相当4.5%、助教相当23.8%、研究員0%） | 13.0%<br>（教授相当11.5%、准教授・講師相当4.2%、助教相当26.3%、研究員0%） | 14.5%<br>（教授相当11.5%、准教授・講師相当4.5%、助教相当28.6%、研究員0%） | 16.4%<br>（教授相当11.5%、准教授・講師相当7.1%、助教相当36.8%、研究員0%） | 15.3%<br>（教授相当14.8%、准教授・講師相当4.3%、助教相当27.3%、研究員0%） | 16.4%<br>（教授相当11..5%、准教授・講師相当6.7%、助教相当41.2%、研究員0%） | 18.1%<br>（教授相当14.8%、准教授・講師相当8.7%、助教相当31.8%、研究員0%） | 15.7%<br>（教授相当11..5%、准教授・講師相当7.1%、助教相当37.5%、研究員0%） |
| 女性研究者上位職比率 | 10.7%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当28.6%、教授相当11.5%、准教授・講師相当4.5%） | 10.3%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当28.6%、教授相当11.5%、准教授・講師相当4.2%） | 10.7%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当28.6%、教授相当11.5%、准教授・講師相当4.5%） | 11.3%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当28.6%、教授相当11.5%、准教授・講師相当7.1%） | 12.1%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当28.6%、教授相当14.8%、准教授・講師相当4.3%） | 10.9%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当28.6%、教授相当11.5%、准教授・講師相当6.7%） | 13.8%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当28.6%、教授相当14.8%、准教授・講師相当8.7%） | 11.3%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当28.6%、教授相当11.5%、准教授・講師相当7.1%） |

4 年度目となる 2018 年度はいずれの項目でも目標値を達成できなかった。しかし実際には、10 月に新規開講した在宅チーム医療薬学寄附講座で女性特任教授（非常勤）が就任しているが、表には反映されていない。本学教員は岐阜市職員であるため、定員の増加は見込めないことから、寄附講座の設置によって女性研究者の採用に努めてきた。今後もこのような取り組みを続けて採用比率の向上を目指す予定である。

岐阜女子大学

| | 1年度目 | | 2年度目 | | 3年度目 | | 4年度目 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績<br>（3月1日現在） |
| 女性研究者採用比率 | 63.6%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当50%、助教相当100%、研究員100%） | 66.7%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当57.1%、助教相当100%、研究員100%） | 75.0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当100%、助教相当100%、研究員100%） | 75.0%<br>（教授相当33.3%、准教授・講師相当100%、助教相当0%、研究員0%） | 50.0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当100%、研究員100%） | 88.9%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当100%、助教相当100%、研究員100%） | 66.7%<br>（教授相当100%、准教授・講師相当0%、助教相当100%、研究員0%） | 46.2%<br>（教授相当28.6%、准教授・講師相当50.0%、助教相当100%、研究員100%） |
| 女性研究者在職比率 | 49.5%<br>（教授相当18.8%、准教授・講師相当69%、助教相当100%、研究員100%） | 52.7%<br>（教授相当21.7%、准教授・講師相当75.8%、助教相当100%、研究員100%） | 50.0%<br>（教授相当18.8%、准教授・講師相当67.9%、助教相当100%、研究員100%） | 54.7%<br>（教授相当22.7%、准教授・講師相当84.4%、助教相当100%、研究員100%） | 49.5%<br>（教授相当18.8%、准教授・講師相当66.7%、助教相当100%、研究員100%） | 55.3%<br>（教授相当22.7%、准教授・講師相当85.7%、助教相当100%、研究員100%） | 50.5%<br>（教授相当20.8%、准教授・講師相当64.3%、助教相当100%、研究員100%） | 51.8%<br>（教授相当250%、准教授・講師相当88.0%、助教相当100%、研究員100%） |
| 女性研究者上位職比率 | 35.2%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当20%、教授相当18.8%、准教授・講師相当69.0%） | 42.0%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当22.2%、教授相当22.2%、准教授・講師相当75.8%） | 34.5%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当20%、教授相当18.8%、准教授・講師相当67.9%） | 47.4%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当0%、教授相当22.7%、准教授・講師相当84.4%） | 33.7%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当20%、教授相当18.8%、准教授・講師相当66.7%） | 45.9%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当0%、教授相当22.7%、准教授・講師相当85.7%） | 34.5%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当20%、教授相当20.8%、准教授・講師相当64.3%） | 43.4%<br>（学長相当100%、副学長・理事相当0%、教授相当25.0%、准教授・講師相当80.0%） |

岐阜女子大学は、女子大学として従来から女性教員が多く、女性研究者在職比率を維持し、上位職比率を上げることが課題である。事業開始後、メンター制度を取り入れたり、特任教員を雇い入れ、若手研究者の研究力向上のための指導に当たらせたりしており、上位職比率も伸びている。

アピ株式会社

| | 1年度目 | | 2年度目 | | 3年度目 | | 4年度目 | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績 | 目標値 | 実績<br>（3月1日現在） |
| 女性研究者採用比率 | 50.0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当0%、研究員50%） | 50.0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当0%、研究員50.0%） | 50.0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当0%、研究員50%） | 60.0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当50.0%、研究員61.5%） | 50.0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当0%、研究員50%） | 33.3%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当0%、研究員35.7%） | 50%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当0%、研究員50%） | 75.0%<br>（教授相当0%、准教授・講師相当0%、助教相当0%、研究員75.0%） |
| 女性研究者在職比率 | 42.9%<br>（教授相当16.7%、准教授・講師相当66.7%、助教相当48%、研究員40.4%） | 42.9%<br>（教授相当14.3%、准教授・講師相当57.1%、助教相当42.9%、研究員45.2%） | 43.0%<br>（教授相当16.7%、准教授・講師相当66.7%、助教相当48%、研究員40.8%） | 45.7%<br>（教授相当16.7%、准教授・講師相当41.7%、助教相当48.1%、研究員49.0%） | 43.8%<br>（教授相当16.7%、准教授・講師相当71.4%、助教相当48%、研究員41.2%） | 42.3%<br>（教授相当16.7%、准教授・講師相当46.2%、助教相当37.5%、研究員47.2%） | 44.0%<br>（教授相当16.7%、准教授・講師相当71.4%、助教相当48%、研究員41.5%） | 49.1%<br>（教授相当37.5%、准教授・講師相当40.0%、助教相当41.9%、研究員55.9%） |
| 女性研究者上位職比率 | 35.7%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当0%、教授相当16.7%、准教授・講師相当66.7%） | 35.7%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当0%、教授相当14.3%、准教授・講師相当57.1%） | 35.7%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当0%、教授相当16.7%、准教授・講師相当66.7%） | 33.3%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当0%、教授相当16.7%、准教授・講師相当41.7%） | 40.0%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当0%、教授相当16.7%、准教授・講師相当71.4%） | 36.8%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当0%、教授相当16.7%、准教授・講師相当46.2%） | 40%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当0%、教授相当16.7%、准教授・講師相当71.4%） | 38.9%<br>（学長相当0%、副学長・理事相当0%、教授相当37.5%、准教授・講師相当40.0%） |

連携協議会の中で唯一の企業であるアピ株式会社は、大学の職階とは異なるものの役職に準じてその比率に対応している。採用比率・在職比率に関して、昨年度は目標を達成できなかったが、本年度は共に目標を達成、特に採用比率に於いては75.0%と大幅に増加した。残念ながら上位職比率に関しては目標が40%に対し、38.9%とわずかな差で達成できなかった。今後は、女性研究者の増加と活躍を目標に対策を講じていきたい。

## 2. 女性研究者の研究力向上のための取り組み

本事業における最も重要な取り組みのひとつは、**連携型共同研究助成**である。これは、連携機関に所属する女性研究者が、研究代表者として他の機関に所属する研究者と連携して研究を始める場合に研究費を助成する制度であり、領域横断的かつ産学の枠を超えた共同研究を実現することによって独創性に満ちた研究を促すとともに、共同研究において PI（研究主宰者）を経験することにより、若手女性研究者が研究進捗管理や協力体制の構築等にかかる能力を向上させるための環境整備を目指すものである。

自主経費となった 2018（平成 30）年度も岐阜大学で 4 件、岐阜薬科大学で 2 件、岐阜女子大学で 1 件、アピ株式会社で 1 件の研究課題を採択した。また、成果報告会を 2019（平成 31）年 2 月 26 日に開催し、連携機関の内外に対して研究成果について広く周知した。来年度以降も機関ごとに新規課題に対して引き続き研究助成を行う予定であり、連携機関以外に所属する研究者にも広く参加を促している。

採択課題の中には、論文や学会発表、特許出願や書籍出版などの成果に繋げた事例のほか、研究に参加した女性研究者の上位職への登用が実現した事例もあり、本助成事業が女性研究者の活躍に高い効果を上げていることを確認した。

研究者が国際的な場でプレゼンテーションをしたり、国際論文への投稿を試みる際の支援として、**英語コミュニケーション力向上セミナー**を開催した。専門分野や英語のレベルにより参加者のニーズは多様であるものの、アンケート結果では受講者全員が、セミナーについて「役に立った（将来役に立つと思う）」と回答した。また、セミナーの他にも英語論文投稿の際の**英文校閲費用助成**を行い、2018（平成 30）年度は 9 件（岐阜大学 2 件、岐阜薬科大学 7 件）に対して助成を行った。

岐阜女子大学およびアピ株式会社において**研究倫理研修**が開催され、4 機関から多くの教職社員が参加した。

小学生の子どもを持つ女性研究者にとって、長期休暇中の子どもの預け先等は、頭を悩ませる大きな問題である。特に研究者の中には実家が遠方にあり、また夫婦共働きのため配偶者と別居して一人で子育てをする「ワンオペ」の母親研究者も少なくない。本事業の一環として、従来から岐阜大学で実施していた**夏季休暇中の学童イベント「カモミールこども大学」**を 4 機関による学童保育プログラムとして統合したうえで今年度も引き続き開催した。

各機関において**メンター制度**を実施し、相談内容に応じてメンター（先輩研究者）の紹介や学内で利用できる制度等に関する情報提供を行った。

## 2-1. 連携型共同研究助成

2018（平成 30）年度採択の連携型共同研究課題

| 申請者<br>（所属・職名） | 研 究 課 題 | 共同研究者<br>（申請時の所属・職名） |
|---|---|---|
| 柴田 早苗<br>岐阜大学<br>応用生物科学部・准教授 | プロポリスを含有する動物用創傷保護剤の製品化に向けた研究 | 荒木 陽子<br>アピ株式会社 長良川リサーチセンター・製品開発顧問<br>川部 美史<br>岐阜大学 応用生物科学部・助教<br>髙島 諭<br>岐阜大学 応用生物科学部・助教 |
| 稲垣 瑞穂<br>岐阜大学<br>応用生物科学部・助教 | 授乳と離乳による微生物共生関係の変換点<br>～離乳食開始の指標づくり～ | 岡本 朋子<br>岐阜大学 応用生物科学部・助教<br>中村 日南<br>岐阜女子大学 家政学部・助手 |
| 山根 京子<br>岐阜大学<br>応用生物科学部・准教授 | ワサビの甘味の客観的評価方法の確立 | 清水 祐美<br>岐阜女子大学 家政学部・講師 |
| 小山 真紀<br>岐阜大学<br>流域圏科学研究センター・准教授 | 生きづらさ学研究成果の出版 | 大崎 友記子<br>岐阜女子大学 家政学部・教授<br>相原 征代<br>岐阜大学 流域圏科学研究センター・特別協力研究員<br>船越 高樹<br>京都大学 学生総合支援センター・特定准教授<br>王 柳蘭<br>同志社大学 グローバル地域文化学部 准教授<br>吉岡 剛彦<br>佐賀大学 教育学部 教授<br>大塚 類<br>青山学院大学 教育人間科学部 准教授 |
| 井戸 章子<br>岐阜薬科大学<br>衛生学研究室・助教 | 新規皮膚感作性試験法の確立と天然物の皮膚感作性評価 | 古宮 舞<br>アピ株式会社 長良川リサーチセンター・研究員 |
| 辻 美恵子<br>岐阜薬科大学<br>薬化学研究室・助教 | 放射線増感作用を目指す腫瘍特異的活性酸素放出型プロドラッグの開発研究 | 野澤 麻枝<br>岐阜大学 大学院医学系研究科・特任助教<br>松尾 政之<br>岐阜大学 大学院医学系研究科・教授<br>森 崇<br>岐阜大学 応用生物科学部・教授 |

| | | |
|---|---|---|
| 佐々木恵理<br>岐阜女子大学<br>文化創造学部・准教授 | 大学生の精神的健康に影響を与える要因の多角的検討 | 山本 眞由美<br>岐阜大学 保健管理センター 教授<br>西尾 彰泰<br>岐阜大学 保健管理センター 准教授<br>齋藤 陽子<br>岐阜女子大学 文化創造学部 准教授<br>堀田 亮<br>岐阜大学 保健管理センター 助教<br>今村 七奈子<br>岐阜大学 保健管理センター<br>臨床心理士<br>栗木 由美子<br>岐阜大学 保健管理センター<br>臨床心理士 |
| 森本 智美<br>アピ株式会社<br>長良川リサーチセンター・主任 | プロポリスタブレット摂取による歯周病原因菌定着抑制および口腔内環境改善に関する研究 | 田中 香お里<br>岐阜大学<br>大学院連合創薬医療情報研究科・教授<br>田澤 茂美<br>アピ株式会社 長良川リサーチセンター・課長代理 |

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」

# 平成 30 年度　連携型共同研究助成報告書（岐阜大学用）

**研究代表者**

| | |
|---|---|
| ふりがな | しばた　さなえ |
| 氏名 | 柴田　早苗 |
| 所属 | 応用生物科学部 |
| 職名 | 准教授 |
| E-mail | shiba211@gifu-u.ac.jp |
| 電話番号 | 058-293-3465/2962/2963（内線:5737） |

**研究課題名**

プロポリスを含有する動物用創傷保護剤の製品化に向けた研究

**共同研究者名**　（氏名、所属機関、部局、職名、性別）

- 荒木陽子、アピ株式会社、長良川リサーチセンター、製品開発顧問、女性
- 川部美史、岐阜大学、応用生物科学部、助教、女性
- 髙島諭、岐阜大学、応用生物科学部、助教、男性

**研究の目的**

犬や猫における手術後の合併症として、術創離開が挙げられる。さまざまな原因から術創離開は起こるが、犬や猫では術創を舐めることが原因となることが多い。一般的に、ガーゼや包帯を巻いて術創を保護することが多いが、動物によっては、飼い主の目が届かないときにそれらを外し、創部を舐め崩してしまうことがある。その結果、術創離解が生じる。そのため、舐めることを防止するために、アニマルネッカーや保護服が利用されているが、これらには以下のような多くの問題がある。まず、アニマルネッカーを使用した場合、動物の視界が狭くなり、恐怖感からパニックに陥って暴れることがある。また、四肢や尾の末端に創傷がある場合には口が容易に届いてしまうため、大きなアニ

マルネッカーを使用する必要があり、動物の行動が制限されてしまう。さらには、動物に我慢を強いるために飼い主が同情し、獣医師の許可なしに飼い主が外してしまうことがある。保護服の場合、体幹部の創傷保護しかできないことや、服を破壊して創部を舐めてしまうことが問題として挙げられる。以上より、獣医療領域において、創傷保護のための新しいツールが望まれている。そこで、**動物が舐めることを嫌うような味成分をコーティングした動物用創傷保護剤の製品化**を目的とした。

**目的達成度および研究の成果と課題**

これまでの研究から、プロポリス二次抽出物が動物用の創傷保護剤に使用できることが示されてきた。そこで、動物が舐めることを嫌うような味成分をコーティングした動物用創傷保護剤の製品化を目的として、研究に取り組もうとした。その際、必要となったのは、共同開発先である。当初、あたりをつけていた共同開発先との調整がうまくいかなかったため、本学の産官学連携推進本部の先生方にご助力いただき、共同開発先を見つけるべくさまざまな対応をしていただいた。しかしながら、良い結果が得られず、共同研究を進めることができなくなってしまった。

そこで、既存の製品とプロポリス二次抽出物を混和することにより、動物用創傷保護材として利用することを検討した。簡単に使用できるという点で、スプレー剤に着目した。数種類の皮膚用のスプレーと混和した結果、プロポリス二次抽出物が２層に分離するスプレー剤を作成することに成功した。スプレー剤には 4%プロポリス二次抽出物が含まれており、我々の研究によって、この濃度での有効性が確認されている。

当初の目的であった創傷保護剤の製品化は実現しなかったが、創傷保護剤としての利用が可能になったことから、目的達成度はある程度維持されていると考えている。今後の課題としては、今回作出したスプレー剤を実際の症例に用い、創傷の治癒経過や家庭での使用感などを調査する必要がある。

**共同研究をすすめるうえでの反省点**

今回の一番の反省点は、共同開発企業が見つからなかったことである。プロポリス二次抽出物を用いた創傷保護剤の開発が、企業にとって魅力的に映らなかったことは、反省すべき点である。

**共同研究の成果のうち、特に、以下の 4 点についての達成度をそれぞれ簡潔に記述してください。**

— PI 経験への貢献度（申請者が PI として、共同研究の役割分担を適切におこない、共同研究者を取りまとめながら、研究を実施することできたか。）

PI として共同研究の役割分担を適切に実施し、研究を進めることができた。また、失敗には終わってしまったが、産官学連携推進本部の先生方と仕事を進めることができたことは、有意義な経験であったと考えている。

— 共同研究の学術的価値（共同研究の学術的価値が高く、独創性があったかどうか。）

プロポリス二次抽出物を用いた本研究は、独創性のある研究であったと考えている。ただ、今年度の研究では学術的価値を見出すことはできなかったので、現在ある予算を来年度に回し、少しでも良い結果につなげていきたいと考えている。

— 共同研究実施者の妥当性（若手女性研究者の研究力が向上したか。）

約３年間の研究を継続することができたことから、それぞれの研究力が向上したと考えている。

— 共同研究の地域貢献性（共同研究によって、地域活性化ができたか。）

プロポリス二次抽出物を含有するスプレー剤の使用について、今後積極的にアピールすることができれば、製造元であるアピ株式会社にとって、経済的利益に直結するものと考えている。

**この連携型共同研究の成果に関する研究発表・報告等**

- 平成３０年度中部地区医療・バイオ系シーズ発表会（2018 年 12 月 12 日）

**その他（特記すべき事項など）**

現在、特許出願中である。
発明の名称「動物用患部保護材及び忌避剤」
特許出願番号「特願 2017-148142」

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」

# 平成 30 年度　連携型共同研究助成報告書（岐阜大学用）

**研究代表者**

| | |
|---|---|
| ふりがな | いながき　みずほ |
| 氏名 | 稲垣　瑞穂 |
| 所属 | 岐阜大学応用生物科学部応用生命科学課程 |
| 職名 | 助教 |
| E-mail | mizuho@gifu-u.ac.jp |
| 電話番号 | 058-293-3419 |

**研究課題名**

授乳と離乳による微生物共生関係の変換点　～離乳食開始の指標づくり～

**共同研究者名**　（氏名、所属機関、部局、職名、性別）

岡本　朋子（おかもと　ともこ）、岐阜大学、応用生物科学部、助教、女性
中村 日南（なかむら ひな）、岐阜女子大学、家政学部、健康栄養学科、助手、女性
服部　香織（はっとり　かおり）、岐阜大学、応用生物科学部、学部 4 年、女性

**研究の目的**

赤ちゃんの腸内細菌叢は、「離乳食開始前は *Bifidobacterium* が定着し、離乳食の開始とともに、やがて大人と似た腸内細菌叢が形成される」と言われている。一方で、私たちは、離乳食を開始する前の乳児のウンチの色やニオイが日々異なることを観察している。この観察から、乳児の腸内細菌叢は、日々細やかに変化しているのではないかと着想した。また授乳中の母親から、離乳食の開始を決める明確な目安がないという問題が寄せられた。厚生労働省のガイドラインでは、離乳食は 5～6 か月に始めることと記載されている。しかし、多くの親は、子の月齢に応じて離乳食を開始するが、その開始に伴い食物アレルギー等の発症を懸念する。離乳食の開始時期とアレルギー発症の関連性を指摘する報告は数多くあるものの、未だ明確な答えはない。本研究では、離乳食の開始時期を考える上でも、乳児の腸内細菌叢の遷移を明らかにする必要があると考え、被験者 5 名の完全母乳哺育の母親の協力のもと、生後 3 か月～7 か月（被験者により協力期間が異なる）の乳児の糞便を集めて、腸内細菌叢解析を行った。

**目的達成度および研究の成果と課題**

目標達成度　90%

乳幼児の健康を守る上で腸内での乳酸が鍵である可能性を示すことができた。

離乳食開始の指標については、更なる検討が必要である。

【研究の成果】

- 同じ母乳哺育であっても、乳児腸内細菌叢は、*Bifidobacterium*属が優占する腸内細菌叢を持つ乳児（優占型，n=3）と*Bifidobacterium*属が優占しない腸内細菌叢を経験する乳児（非優占型，n=2）に分けられることがわかった。
- 優占型乳児の腸内細菌叢は、遷移の範囲が狭く安定的であり、非優占型乳児の腸内細菌叢は、遷移の範囲が広く不安定と特徴づけられた。
- 非優占型乳児（n=2）では、離乳食開始前に罹患が共通して見られた。しかし、罹患と腸内細菌叢そのものには関連があるのではなく、罹患と腸内環境（腸内細菌叢により生産される有機酸・乳酸）が関連していることが示唆された。

【課題】論文化を目指す。

**共同研究をすすめるうえでの反省点**

倫理審査、検体集め、次世代シーケンサー解析までは稲垣・服部さんが担当し、その後の生物群衆解析では、岡本先生がご専門とされる解析技術を生かしていただき、新しい知見へと結びついた。年度末にデータが揃ってきたため、管理栄養士の中村先生との討議・報告の機会が少なかった。今後、ご意見を織り交ぜて公表論文としてまとめていきたい。

**共同研究の成果のうち、特に、以下の 4 点についての達成度をそれぞれ簡潔に記述してください。**

— PI 経験への貢献度（申請者が PI として、共同研究の役割分担を適切におこない、共同研究者を取りまとめながら、研究を実施することできたか。）

100 を超える検体の管理・解析となったが、担当者である服部さんが本当に頑張ってくれた。データ取得だけでなく、考察においても一躍を担っていた。女性教員がそれぞれの得意分野を持ち寄ることで、一つの研究が完成したという印象を持っている。

— 共同研究の学術的価値（共同研究の学術的価値が高く、独創性があったかどうか。）

昨年中、乳児腸内細菌叢の報告がされたが（Nature Communication, 2018 夏）、国内・国外問わず新規性があり、学術的価値は高いと判断している。

— 共同研究実施者の妥当性（若手女性研究者の研究力が向上したか。）

互いに異分野であるため、データの読み取り方、討議は活発であった。知識だけでなく着想力の向上にも繋がった。

— 共同研究の地域貢献性（共同研究によって、地域活性化ができたか。）
地域貢献度が低いテーマであり達成度が示せない。ただ母親からのヒアリングでは、本研究に対する高い関心・今後の進展（乳幼児の研究）を期待する声を預かっている。

**この連携型共同研究の成果に関する研究発表・報告等**

日本酪農科学会 2019 にて発表予定
投稿論文として執筆予定

**その他（特記すべき事項など）**

特になし

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」

# 平成 30 年度　連携型共同研究助成報告書（岐阜大学用）

**研究代表者**

| | |
|---|---|
| ふりがな | やまね　きょうこ |
| 氏名 | 山根　京子 |
| 所属 | 岐阜大学応用生物科学部 |
| 職名 | 准教授 |
| E-mail | kyamane@gifu-u.ac.jp |
| 電話番号 | 058-293-2846 |

**研究課題名**

ワサビの甘味の客観的評価方法の確立

**共同研究者名**　（氏名、所属機関、部局、職名、性別）

清水祐美、岐阜女子大学、家政学部健康栄養学科、講師、女性

**研究の目的**

ワサビには、辛さだけでなく、甘味、香り、粘り、旨味、苦味、えぐみ、という複雑な要素が存在することはあまり知られていない。しかしながら、全国生産者大会における品評会では、ワサビの味は重要な審査項目であり、これからの品種育成においても重要な形質である。ところが、ワサビの味を比較する際には、客観的な指標が存在せず、官能試験を実施するより他に方法がなかった。そこで本研究では、糖度計を用いてワサビの甘味を調査し、官能試験と組み合わせることで、客観的な指標になりえるかどうかを明らかにし、最終的には、官能試験に頼ることなく、糖度計で甘味を評価するシステムを構築し、品種育成などに役立てることを目的とした。

**目的達成度および研究の成果と課題**

今回はワサビの味の評価に、糖度計と急きょ塩分計も用いることとした。また味の評価項目としては「甘味」ではなく、品評会の調査項目である「旨味」を調査した。具体的には、品評会に出品された「根茎の部」115 点のうちの 10 点を供試材料とし、品評会で用いた同一個体の残りを、品評会翌日に岐阜大学応用生物科学部にて調査した。その結果、辛味と旨

味得点の間に有意な相関関係はみられなかったものの、辛味得点と塩分の関係では、有意水準 5%で有意な正の相関関係が、旨味得点と糖度の間でも有意水準 5%で有意な負の相関関係がみられた。今回用いた 10 個体は、いずれも日本を代表するワサビ品種の優良個体であることは間違いなく、辛味も旨味もレベルが高く、結果的に僅差での分析となったため、比較解析は難しかったと考えられる。にもかかわらず、ある程度の関係性がみえたことは今後につながる有力な情報であるといえるだろう。今回こうした違いが味の違いにどのように影響を与えたのかは不明である。今後は、産地や品種ごとの違いを計測し、情報を蓄積することで、辛味と旨味を客観的に測定できる手法の確立に向け、さらなる検討が必要である。

**共同研究をすすめるうえでの反省点**

前回よりも、連絡をとり、研究協議をする時間を確保できなかった点が反省点である。また、今回詳細な官能試験は行えなかった点も、残念な結果となった。

**共同研究の成果のうち、特に、以下の 4 点についての達成度をそれぞれ簡潔に記述してください。**

— PI 経験への貢献度（申請者が PI として、共同研究の役割分担を適切におこない、共同研究者を取りまとめながら、研究を実施することできたか。）

PI としては、実験を遂行するだけでなく、適切な時期に成果を公表および発表するためのスケジュール管理が要求される。そのうえでは、山葵連合会報に記事を掲載するなどの一定の成果をあげることができたと自負している。

— 共同研究の学術的価値（共同研究の学術的価値が高く、独創性があったかどうか。）

専門性が異なる研究者同士のコラボレーションは、思いがけない化学反応をうみ、生産の現場にもかなりの反響を得ている。学術的な検証は、今後の課題となる。

— 共同研究実施者の妥当性（若手女性研究者の研究力が向上したか。）

共同研究者の清水先生は、官能試験や成分分析に精通しているため、本研究の遂行に最適のパートナーであったと確信している。

— 共同研究の地域貢献性（共同研究によって、地域活性化ができたか。）

本研究の成果は、わさびの味の地域差を検出するためにも開発を進めた経緯がある。岐阜大学および岐阜女子大学の共同研究ということで、今後は、岐阜県の産地などのワサビも計測

し、地域間差を調査したい。

**この連携型共同研究の成果に関する研究発表・報告等**

山根京子：生ワサビの辛味および旨味の客観的評価方法の検討. 山葵連合会報（印刷中）

**その他（特記すべき事項など**

本研究の成果は、わさび生産者組合の総会で紹介され、高い関心を得ている。そのため、本調査項目は事務局と相談しながら、次回の第 34 回全国ワサビ生産者大会でも評価項目として加える方向で検討をしている。

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」

# 平成 30 年度　連携型共同研究助成報告書（岐阜大学用）

**研究代表者**

| | |
|---|---|
| ふりがな | こやままき |
| 氏名 | 小山真紀 |
| 所属 | 流域圏科学研究センター |
| 職名 | 准教授 |
| E-mail | maki_k@gifu-u.ac.jp |
| 電話番号 | 058-293-2441 |

**研究課題名**

生きづらさ学研究成果の出版

**共同研究者名**　（氏名、所属機関、部局、職名、性別）

大崎友記子，岐阜女子大学 家政学部生活科学科住居学専攻，教授，女性
船越高樹，京都大学 学生総合支援センター，特定准教授，男性
相原征代，岐阜大学 流域圏科学研究センター，特別協力研究員，女性
王柳蘭，同志社大学 グローバル地域文化学部，准教授，女性
吉岡剛彦，佐賀大学，教育学部，教授，男性
大塚類，青山学院大学 教育人間科学部，准教授，女性

**研究の目的**

研究代表者は，これまで，文部科学省科学技術人材育成費補助事業「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」の連携型共同研究助成によって，生きづらさ学に関する研究を進めてきた．この研究を通じて，生きづらさは，貧困，飢餓，外傷や疾患などを除き，自分の内面から生じるもの，他者との関係性の中で生じるもの，社会システムによるものといった 3 つの立場に分けられること，そしてそれを解決するためには，多様な分野それぞれからの視点によって，複合的な分析を行う必要がある事を整理した．そこで，これらの成果を，生きづらさを抱える人への多様な視点からの処方箋としてまとめ，生きづらさ学研究の成果の出版を行う．

**目的達成度および研究の成果と課題**

ナカニシヤ書店から書籍「生きづらさへの処方箋　小山真紀・相原征代・船越高樹　編」を平成 31 年 2 月 28 日に刊行した.

**共同研究をすすめるうえでの反省点**

現在，書籍の出版を行う際には著者による資金の持ち出しがないと難しいという現状があるが，岐阜大学には出版支援のための制度が少ないため，企画ができていても出版することが難しいという問題に直面した．今回，支援を頂けた事は大変助かったが，それでも自己負担がその倍以上となっているため，非常に厳しかった.

**共同研究の成果のうち、特に、以下の 4 点についての達成度をそれぞれ簡潔に記述してください。**

— PI 経験への貢献度（申請者が PI として、共同研究の役割分担を適切におこない、共同研究者を取りまとめながら、研究を実施することできたか。）

出版のとりまとめなど，調整力は向上したと思われる.

— 共同研究の学術的価値（共同研究の学術的価値が高く、独創性があったかどうか。）

本共同研究は，本当の意味で分野横断であり，チャレンジングなテーマを扱っている．多様な分野から関わる事で，派生的な研究も生まれはじめており，「生きづらさ学」を出発点とした，より具体的なテーマで，共同研究者が外部資金を獲得するなど，「生きづらさ学」そのものだけでなく，これを出発点とした多様な発想に繋がっている点で，特に価値が高い.

— 共同研究実施者の妥当性（若手女性研究者の研究力が向上したか。）

上と同じであるが，多様なバックグラウンドを持つ研究者が協働することに意味があり，そこから，生きづらさ学に繋がる具体的テーマで共同研究が派生しているなど，研究力向上にも寄与している.

— 共同研究の地域貢献性（共同研究によって、地域活性化ができたか。）

本研究グループで取り上げたテーマは，あらゆる人に係わるテーマであり，出版した書籍も「生きづらさ」には，自分の中の思いと現実，他者との関係，自分と社会との関係にギャップがある状態で特に生じるものであり，この処方の事例をテーマや分野の切

り口で取り上げたものである．大学生をターゲットとしてまとめられた書籍であるが，広く一般に適用できるものであると考える．

**この連携型共同研究の成果に関する研究発表・報告等**

小山真紀・相原征代・舩越高樹　編：生きづらさへの処方箋，ナカニシヤ出版，2019/2/28.

**その他（特記すべき事項など）**

幸いにも 4 年間助成を頂く事ができ，成果を出版することができました．生きづらさ学自体は今後も継続して進めていきますが，ひとまず形になったことについてほっとしております．本当にありがとうございました．これまでの研究を通じて，いくつか思う所がありますので，こちらについて少し述べさせてください．この助成でもそうですが，早期に「成果」をまとめることが要求されます．しかし，「新たな分野の出会い，コラボレーション」を大事にして，将来のイノベーティブな研究に繋げることを指向した場合，早期に成果を出すことよりも，まずは，そういう場を醸成する事が必要であると感じます．一方で，短期間での成果の創出を求める圧力は年々増しており，共同研究を促したとしても，同じ分野か近い分野での協働が精一杯（真にチャレンジングなことは，期間内に成果を出す事が求められる外部資金ではできない，そして，運営費交付金は年々小さくなる上，文科省は全ての教員の年棒制や任期の導入を目指しているとも聞きます．このような状況で，論文などの成果のみで教員評価がなされるようになるならば，チャレンジングなことは，リスクにしかならないという事になりかねず，日本の学術研究にとって大きなマイナスになると危惧します）という現状です．

これまで行ってきた「生きづらさ学」は，係わっている研究者の分野は「医学」「看護学」「経済学」「社会学」「教育学」「文化人類学」「宗教学」「文学」「理学」「工学」と，多岐に渡っています．そして，この研究を通じて，外の世界から自分の研究分野を見つめ直すことで，新たな発見があった人も出てきています（海外に出ることで，初めて日本という国のことが見える．という話に似ていると思います）．そして，それが次なる展開に繋がりつつあり，私自身，驚きを感じる（発展的な展開ができたらという思いはあったが，近いうちに実現できる確証はなかったため）と共に，アカデミアには，こういう場がもっと必要なのではないかと強く感じました．本プロジェクトはあと 2 年と伺っていますが，今後は，すぐに成果を求める系のものではなく，研究者同士のネットワーキングを促す仕組みなどを仕掛けていけると良いのではないかと思っています．

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」

# 平成 30 年度　連携型共同研究助成報告書（岐阜薬科大学用）

研究代表者

| | |
|---|---|
| ふりがな | いど　あきこ |
| 氏名 | 井戸　章子 |
| 所属 | 岐阜薬科大学　衛生学研究室 |
| 職名 | 助教 |
| E-mail | aido@gifu-pu.ac.jp |
| 電話番号 | 058-230-8100 (内線 3645) |

研究課題名

新規皮膚感作性試験法の確立と天然物の皮膚感作性評価

共同研究者名　（氏名、所属機関、部局、職名、性別）

古宮 舞　（アピ株式会社 長良川リサーチセンター　研究員、女性）

共同研究をすすめるうえでの反省点

今回、アピ株式会社の古宮 舞さんと共同研究をさせていただいた。最初に実験の役割分担を決め、研究協力者の力も借りて慎重に進めたものの、予定していた実験は完了できなかった。今後、本研究をスムーズに進めるに当たり、来年度からの実験スケジュールをさらに綿密に立てるべきだと思う。また、岐阜薬科大学とアピ株式会社 長良川リサーチセンターというお互いが異なる場所で実験を行っているため、テレビ電話（Skype）等を利用してこまめにディスカッションすることを心掛けたい。

共同研究の成果のうち、特に、以下の 4 点についての達成度をそれぞれ簡潔に記述してください。

— PI 経験への貢献度（申請者が PI として、共同研究の役割分担を適切におこない、共同研究者を取りまとめながら、研究を実施することできたか。）

今年度は、今回のテーマである「新規皮膚感作性試験法の開発における基礎研究」

を申請者主導で共同研究者とともに行うことができた。また本研究は、共同研究者とは別に、本研究室の研究補助員である目加田京子さんにマウスの系統維持や解剖実験等を、博士課程の女子学生に実験の一部を協力してもらった。彼女らへの指導も主体的に行うことで良い結果に繋げることができた。

— 共同研究の学術的価値（共同研究の学術的価値が高く、独創性があったかどうか。）

申請者らはこれまでの経験から、現在の試験系より安全・簡便かつ正確な *in vitro* および *in vivo* 感作性試験を確立し、これらの試験法を用いて各種天然物のリスク評価を行うことを目的としている。今年度はとくに新規 *in vivo* 試験法についての検討を行い、今回提案する試験法のさらなる有用性を見出すことができた。今後、未だ明らかではない蜂産品等の天然物の曝露影響の評価を目的としており、本研究結果により、天然物の香粧品としての安全な使用に向けた基礎的データの収集に大いに貢献できる。

— 共同研究実施者の妥当性（若手女性研究者の研究力が向上したか。）

本研究では、共同研究者のアピ株式会社の主任研究員 古宮 舞さんと、研究分野のみならず、異なる立場でディスカッションしながら実験を進めることができた。また、研究協力者である本研究室の女性研究補助員や博士課程の女子学生と、女性研究者間でのコミュニケーションを図ることで、お互いの研究力のさらなる向上ができた。

— 共同研究の地域貢献性（共同研究によって、地域活性化ができたか。）

本研究はアピ株式会社との共同研究であった。今年度までに、私たちが提案する新規皮膚感作性試験法について、今後につながる良い結果が得られたと確信している。今後さらなる検討を重ねて成果を出すことで、養蜂業が盛んな岐阜の名産とも言える蜂産品を初め、さまざまな天然物を香粧品等として安全に使用するための基礎的なデータを得るためのツールとなる可能性が期待される。また本研究での試験法の確立により、蜂産品の安全性が示されれば、このような製品を製造販売する地域産業の発展にも貢献できると考えている。

**この連携型共同研究の成果に関する研究発表・報告等**

今年度の成果は現在のところ未発表であるため、今回は非公開とさせていただいた。今後、学会等で発表するとともに、最終目標達成後には論文発表も行う予定である。

**その他（特記すべき事項など）**

特になし

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」

# 平成 30 年度　連携型共同研究助成報告書（岐阜薬科大学用）

**研究代表者**

| | |
|---|---|
| ふりがな | つじ　みえこ |
| 氏名 | 辻　美恵子 |
| 所属 | 岐阜薬科大学創薬化学大講座薬化学研究室 |
| 職名 | 助教 |
| E-mail | tsuji@gifu-pu.ac.jp |
| 電話番号 | 058–230–8112 |

**研究課題名**

放射線増感作用を目指す腫瘍特異的活性酸素放出型プロドラッグの開発研究

**共同研究者名**　（氏名、所属機関、部局、職名、性別）

野澤 麻枝、岐阜大学、医学研究科 腫瘍抑制学放射線化学分野、助教、女
松尾 政之、岐阜大学、医学研究科 腫瘍抑制学放射線化学分野、教授、男
森 崇、岐阜大学、応用生物科学部 獣医分子病態学研究室、教授、男

**研究の目的**

非公開

**目的達成度および研究の成果と課題**

**〈目的達成度〉**

非公開

**〈研究成果〉**

非公開

**〈研究課題〉**

非公開

**共同研究をすすめるうえでの反省点**

共同研究を進める上で、分子設計と合成、試験管レベルの機能評価を岐阜薬大で行い、共同研究期間に岐阜大学で化合物の活性評価を行う予定であった。しかしながら、モデル化合物の機能評価で止まってしまい、連携を進めるに到らなかった。今後評価方法などの情報のやり取りを行っていきたい。

**共同研究の成果のうち、特に、以下の 4 点についての達成度をそれぞれ簡潔に記述してください。**

— PI 経験への貢献度（申請者が PI として、共同研究の役割分担を適切におこない、共同研究者を取りまとめながら、研究を実施することできたか。）

共同研究の役割分担は適切に行う事ができた。しかし、助教として学生の指導とプロジェクトの進行は難しかった。今後は PI として様々な事態に柔軟に対応しできるような体制のもと研究を行っていきたい。

— 共同研究の学術的価値（共同研究の学術的価値が高く、独創性があったかどうか。）

本研究では放射線や化学療法を逃れて再発や予後不良に陥っている治療抵抗性を示す悪性度の高い腫瘍の育成環境における適応系と環境ストレスのバランスに着目した研究となっている。腫瘍の生存を妨げようとする独創的な戦略で挑戦的な取り組みであったと考える。

— 共同研究実施者の妥当性（若手女性研究者の研究力が向上したか。）

本研究では、化学を専門とする申請者が放射線治療の臨床医である野澤医師らのアドバイスをもとに、より臨床研究を意識した研究に取り組むきっかけとなった。

— 共同研究の地域貢献性（共同研究によって、地域活性化ができたか。）

本研究は、化学療法、放射線治療に対し治療抵抗性を示す難治性がんに対する新たな治療戦略を確立することを目指している。今年度はモデル化合物の評価に留まったが、今後も臨床系との連携しながら、地域医療に貢献できるような研究を引き続き行なって行きたい。

**この連携型共同研究の成果に関する研究発表・報告等**

非公開

**その他（特記すべき事項など）**

特になし

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」

# 平成 30 年度　連携型共同研究助成報告書

**研究課題名**

大学生の精神的健康に影響を与える要因の多角的検討

**研究代表者**

佐々木　恵理（岐阜女子大学文化創造学部・准教授・女性）

**共同研究者名**

山本　眞由美（岐阜大学保健管理センター・大学院連合創薬医療情報研究科・
医学部附属病院 糖尿病代謝内科・教授・女性）
西尾　彰泰（岐阜大学保健管理センター・医学部附属病院 精神神経科・准教授・男性）
齋藤　陽子（岐阜女子大学文化創造学部・准教授・女性）
堀田　亮（岐阜大学保健管理センター・医学部附属病院 精神神経科・助教・男性）
今村　七菜子（岐阜大学保健管理センター・臨床心理士（非常勤）・女性）
栗木　由美子（岐阜大学保健管理センター・臨床心理士（非常勤）・女性）

**研究の目的**

一般社団法人 国立大学保健管理施設協議会の大学生調査（学生の健康白書, 2015）では,「何となく不安になることが多い」と感じる学生は 43.0%,「いつも憂うつである」も 14.6%と少なくない。大学生の精神的不調は，日常生活や学業へ大きく影響し，ひいては留年，休学，退学の高いリスクである。学生の精神的健康状態を適切に把握し，それらの維持，向上に向けて適切な支援を行うことは，大学における重要課題である。

大学生の精神的健康は，不安感や抑うつ感のみならず，様々な要因によって測定されうる。

既に，大学生特有の心理−精神症状やストレスを多次元的に測定できる尺度として，Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms（CCAPS；Locke et al., 2011）の日本語版 CCAPS（J-CCAPS）の作成を共同研究者（堀田亮）が進めている。本尺度は，8 因子（抑うつ，全般性不安，社会不安，学業に関する悩み，食行動，家族に関する悩み，敵意，物質使用）62 項目から構成され，うち 4 項目はスクリーニング項目（自殺指標，他害指標，攻撃行動，現実感喪失）である（図 1）。これを用いて，大学生に対し実施し，学生の背景情報も含めてデータ解析することで，本研究では，**1. 大学生の精神的健康に関する実態把握**および **2. 精神的健康に影響を与える要因を多角的に解明し，**

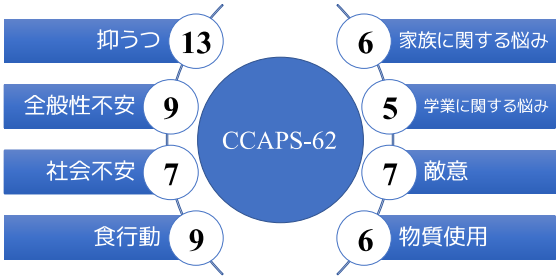



図 1　CCAPS の因子構造
（○の中の数字は質問項目数を示す）

支援実践に役立つ新知見を提唱する。

**目的達成度および研究の成果と課題**

**目的の達成度**

今年度は，上記の目的を達成するための，約 400 名の大学 1 年生を対象としたデータを分析対象とし精神的健康度（J-CCAPS）の検討を行った。

この目的に対しおよそ 90%概ね順調に進展した。その理由としては，大学 1 年次 10 月時点の心理―精神症状を包括的かつ多次元的な特徴で差異を捉えることができたことと，入学時問診票のデータを突合することにより，過去の経験とともに多角的に検討することができた点にある。

以下に，研究目的の 1 に関する研究成果の一部を報告する。

**研究の成果**

**【目的】**

本研究では，大学生特有の心理–精神症状やストレスを多次元的に測定できる尺度として，Counseling Center Assessment of Psychological Symptoms (CCAPS ; Locke et al., 2011) の日本語版 CCAPS（J-CCAPS）を用いて，**1. 大学生の精神的健康に関する実態把握**を行った。

**【方法】**

・対象：平成 30 年度に入学した岐阜大学 1 年生 1,313 人中，入学時の健康診断問診票（基本情報・K10 含む）と 1 年生 10 月の講義時に自己記入式で実施した J-CCAPS の回答がすべて完了している 433 名（男性 241 名，女性 191 名，不明 1 名）の突合データを分析対象とした。有効回収率は，33.0%であった。所属学部の内訳は，教育 99 名，地域 29 名，医学 93 名，工学 154 名，応用生物 57 名であった（表 1)。

表 1 分析対象者の内訳（所属学部と性別）

| | | 性別 | | 合計 |
|---|---|---|---|---|
| | | 男性 | 女性 | |
| 学部 | 教育学部 | 29 | 70 | 99 |
| | 地域科学部 | 16 | 13 | 29 |
| | 医学部 | 45 | 48 | 93 |
| | 工学部 | 123 | 31 | 154 |
| | 応用生物学部 | 28 | 29 | 57 |
| 合計 | | 241 | 191 | 432 |

・調査内容：入学時の健康診断問診票データから，性別，所属学部，過去のいじめ，不登校，ネットゲーム利用の有無，K10 得点を利用した。K10 とは，不安やうつのリスクの高い対

象者を拾いあげるために開発されたスクリーニング尺度である。大規模な疫学研究を経て，項目反応理論によって選定された 10 項目（5 件法）から構成されている。また，最大 50 点中 24/25 点がカットオフポイントとされている。

・1 年生 10 月の調査は，講義時に配付し，自己記入式での記入を求めた。J-CCAPS-62 について，「全く当てはまらない（0)」から「かなりあてはまる（4)」までの 5 件法で回答を求めた。CCAPS は，高等教育機関の学生相談や保健管理センターでの使用を想定して作成された，大学生の心理・症状アセスメント尺度である。J-CCAPS はその日本語版である。過去 2 週間の状態を尋ねる 8 因子 62 項目の質問で構成されている。

・解析方法：データ解析は，SPSS(Ver.23.0)を用いた。*$p<.05$,**$p<.01$,***$p<.001$ を有意差ありとした。また，図の作成は，StatFlex Ver.7（株式会社医学統計研究所）を使用した。

・倫理的配慮：本調査は，岐阜大学大学院医学系研究科医学研究等倫理審査委員会の審査を経て承認（承認番号：28-320）されている。

**【結果と考察】**

１．大学生の精神的健康の記述統計

はじめに，全対象者について精神的健康度（J-CCAPS）の合計得点，下位尺度の平均値，標準偏差を算出した（表 2)。また，得点の分布を図 2 に示した。

表 2　精神的健康度と各下位尺度の項目例，平均値，標準偏差

| | 項目例 | *M* | *SD* |
|---|---|---|---|
| CCAPS合計 | | 64.14 | (29.96) |
| 抑うつ | 孤独でひとりぼっちだと感じる | 13.70 | (8.86) |
| 全般性不安 | 恐怖やパニックに陥ることがある | 9.33 | (5.74) |
| 社会不安 | 皆の前で話さなければならない時に不安になる | 13.43 | (5.22) |
| 食行動 | 食べ物のことばかり考えてしまう | 9.17 | (6.04) |
| 家族 | もっと自分の家族が仲良くしてもらえたらいいのにと思う | 5.12 | (3.99) |
| 学業 | 学業についていけない | 7.27 | (3.16) |
| 敵意 | 怒りを抑えるのが難しい | 4.80 | (4.75) |
| 物質使用 | 必要以上に酒(アルコール)を飲んでしまう | 1.33 | (2.60) |

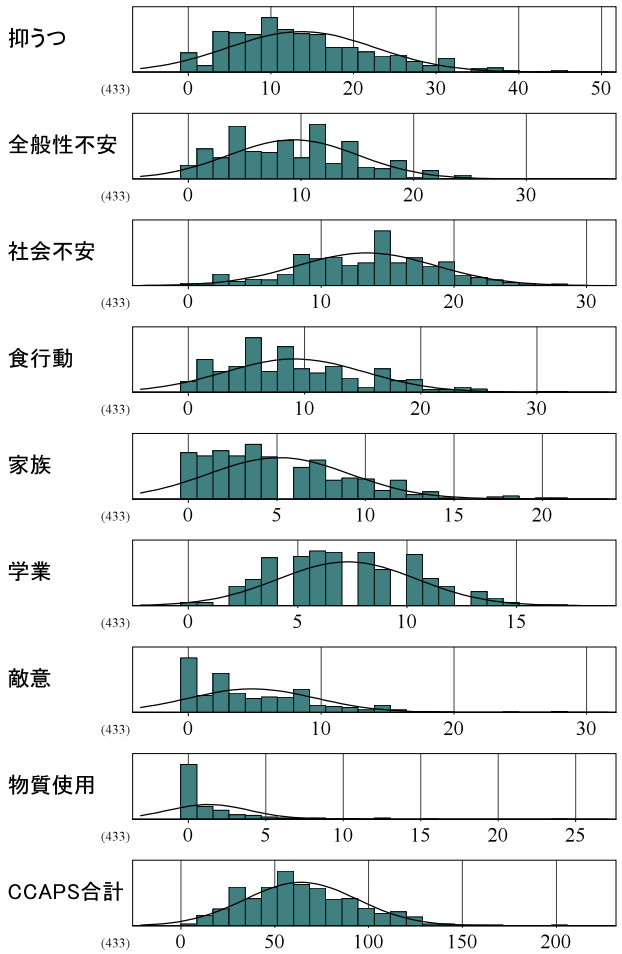



図 2　全回答者における CCAPS 合計得点と下位尺度得点の分布

## 2．性別による精神的健康度（J-CCAPS）の差異

次に，性別によって精神的健康度（J-CCAPS）と下位尺度の平均値が異なるかを対応のない $t$ 検定で検討した。その結果を表 3 に示した。

表 3　精神的健康度（J-CCAPS）の男女別の平均得点と性別比較

| | 男性（$N$=241） | | 女性（$N$=191） | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| | $M$ | $SD$ | $M$ | $SD$ | $t$ 値 | $p$ 値 |
| CCAPS合計 | 64.50 | 32.45 | 63.64 | 26.64 | 0.30 | |
| 抑うつ | 14.10 | 9.16 | 13.19 | 8.50 | 1.06 | |
| 全般性不安 | 9.81 | 6.08 | 8.73 | 5.24 | 1.98 | <.05 * |
| 社会不安 | 13.13 | 5.30 | 13.77 | 5.11 | -1.27 | |
| 食行動 | 7.96 | 5.58 | 10.67 | 6.28 | -4.75 | <.001 *** |
| 家族 | 5.25 | 3.85 | 4.96 | 4.17 | 0.73 | |
| 学業 | 7.57 | 3.34 | 6.90 | 2.90 | 2.20 | <.05 * |
| 敵意 | 5.19 | 5.15 | 4.31 | 4.17 | 1.92 | <.1 + |
| 物質使用 | 1.49 | 2.94 | 1.12 | 2.10 | 1.56 | |

*Note.* $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$, 対応のない $t$ 検定

CCAPS 合計得点については，男女で差はみられなかった。また，下位尺度ごとにみてみると，全般性不安，学業についての悩み，敵意が女性よりも男性の方が有意に高かった。さらに，食行動は，男性よりも女性の方が有意に得点は高かった(表 3)。

このことから，精神的不調は，男子大学生は怒りの感情コントロールに，女子大学生は，食行動に現れやすいことがうかがわれる。

### ３．所属学部による精神的健康度(J-CCAPS)の差異

所属学部によって精神的健康度（J-CCAPS）および下位尺度得点に違いがみられるかを一要因分散分析で検討した（表 4）。

CCAPS 合計得点は，応用生物科学部，地域科学部，工学部，教育学部，医学部の順に得点が高かったが，有意差はなかった。CCAPS 得点は高いほど，ストレスによる心理―精神症状を多く体験していることを示している。

下位尺度それぞれの得点で部局間に差があるか検討してみると，社会不安のみ応用生物学部が医学部に比べて，有意に得点が高かった。

表 4　所属学部別の精神的健康度（J-CCAPS）得点

| | 教育（*N*=99） | | 地域科学（*N*=29） | | 医学（*N*=93） | | 工学(*N*=154) | | 応用生物（*N*=57） | | | | |
|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|---|
| | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *M* | *SD* | *F* 値 | *p* 値 | |
| CCAPS合計 | 63.71 | 25.44 | 65.52 | 25.95 | 62.83 | 36.71 | 63.83 | 30.20 | 67.02 | 27.09 | 0.20 | .94 | |
| 抑うつ | 13.17 | 7.42 | 13.62 | 7.42 | 13.61 | 10.53 | 13.74 | 9.08 | 14.67 | 8.56 | 0.26 | .90 | |
| 全般性不安 | 9.40 | 5.46 | 9.83 | 4.80 | 8.72 | 6.47 | 9.34 | 5.70 | 9.91 | 5.58 | 0.47 | .76 | |
| 社会不安 | 12.88 | 4.85 | 15.10 | 5.54 | 12.30 | 5.70 | 13.47 | 5.06 | 15.14 | 4.79 | 3.73 | ＜.01 | ** 応用＞医学 |
| 食行動 | 9.60 | 5.77 | 8.45 | 5.34 | 9.71 | 6.86 | 8.86 | 5.75 | 8.65 | 6.28 | 0.61 | .65 | |
| 家族 | 5.28 | 4.41 | 4.62 | 2.70 | 5.46 | 4.54 | 5.15 | 3.76 | 4.47 | 3.44 | 0.70 | .59 | |
| 学業 | 7.13 | 2.88 | 7.14 | 3.87 | 6.66 | 3.34 | 7.55 | 2.94 | 7.84 | 3.45 | 1.70 | .15 | |
| 敵意 | 5.02 | 4.22 | 5.10 | 5.17 | 4.37 | 5.21 | 4.64 | 4.89 | 5.42 | 4.31 | 0.56 | .69 | |
| 物質使用 | 1.22 | 2.21 | 1.66 | 2.13 | 2.00 | 4.09 | 1.08 | 1.99 | 0.91 | 1.39 | 2.46 | .05 | |

*Note.* $^{*}p<.05$, $^{**}p<.01$, $^{***}p<.001$, ANOVA(一要因分散分析)

**【総括】**

本研究は，大学 1 年生の調査データを用いて，精神的健康度（J-CCAPS）の実態把握およびその多角的に影響因を明らかにすること目的とした。

担任やゼミ担当教員などは，面談などで学生の過去の情報を得ていることも少なくはなく，要支援学生であることや，経過を注意してみていく必要がある学生であることを把握している。しかし，彼らがどのような心理状態にあるか，またどのような心理的不調に陥りやすいのか把握していくことは容易ではない。今回，J-CCAPS を用いることで，大学生の精神的健康を多角的に捉えることができる可能性が見出され，大学生の指導現場に有用であると考えられた。

**研究の課題**

１．今年度は，入学時の健康診断問診データと１年生（10 月時点）を対象としてデータでの解析を行った。今後は，第１に J-CCAPS を用いて各学年での精神的健康の特徴を把握

すること，第２にそれらが入学時の健康診断問診データの情報との突合により，どのような要因が影響を与えるか検討することが必要である。

２．また，様々な部署や IR 室と連携し，大学が持っている学生情報（入試順位，学業成績，奨学金の有無など）から心の健康と修学アウトカム（特に休退学の有無）との関係を分析していくことが望まれる。

３．この研究成果についての論文執筆を引き続き行い，国内誌への論文投稿および国際学会発表，英語論文投稿を行う。

**共同研究をすすめるうえでの反省点**

主に調査の実施と大規模なサンプルを用いたデータ解析が中心となる分野であるが，成果報告会での講評の中にもあったように，この研究で得られた知見を大学関係者に提供できるような方法での可視化や成果物として発信していくことが必要である。

**共同研究の成果のうち，特に，以下の 4 点についての達成度をそれぞれ簡潔に記述してください。**

**― PI 経験への貢献度（申請者が PI として，共同研究の役割分担を適切におこない，共同研究者を取りまとめながら，研究を実施することできたか。）**

今回の研究グループは，平成 27 年度連携型共同研究のグループメンバーに加えて新しいメンバーの入れ替わりがあったものの，全員に十分役割分担を行い実施することはできなかった。しかし，中核となるメンバーで定期的に進捗状況を確認しながら，研究を遂行することができた。今回の共同研究によって，学外でのメンター指導を受けることができ，PI についての理解が深化し，よい経験となった。

**― 共同研究の学術的価値（共同研究の学術的価値が高く，独創性があったかどうか。）**

これまで学生の精神的健康や支援に関するデータ・資料は，担当する保健管理センターや学生相談室が業務記録として管理していた。しかし，昨今，データサイエンスの時代に突入し，学内の学生に関する学生生活情報や履修状況，学習状況など，大学が保管するデータは様々な部署で多岐にわたり，IR 室の設置など大学ではデータに基づく計画策定や教育の可視化が求められている。学生の４年間の精神的健康の変化や休退学の傾向が様々な要因とともに継続的に把握することは，データに基づく学生指導の確立につながるため学術的価値が高いと考えられる。学生の卒業後（生涯健康教育）の精神健康度向上にも寄与する研究であり，現場への貢献度がきわめて高い。

**― 共同研究実施者の妥当性（若手女性研究者の研究力が向上したか。）**

１．研究代表者が，学園外研修を利用し，毎週火曜日に定期的に研修をさせていただいた。

その際，メンターである女性研究者（山本眞由美）から①統計解析方法についての助言②論文執筆における添削指導③英語論文執筆の基礎的知識から推敲まで特に指導していただく機会を得ることができたため，現在投稿論文が採択予定である。

２．さらに，共同研究者ら（西尾彰泰・堀田亮）は，それぞれ精神科医・臨床心理士として保健管理センター業務を行いながら，積極的な学会発表・論文発表，海外での発表を行っている。共同研究者から助言やアドバイスをいただくことで，メンタルヘルスに関する知識や具体的なノウハウを得ることができた。

３．研究を遂行していくためには，子育てをしながら限られた業務時間の中で取り組む必要があるが，メンターである女性研究者（山本眞由美）から教育活動，研究活動それぞれについての向き合い方や取り組み方について助言いただくことで更なる意識や意欲の向上につながった。

**―　共同研究の地域貢献性（共同研究によって，地域活性化ができたか。）**

岐阜県大学保健管理研究会（岐阜県下の大学の学生保健管理や学生支援担当者が参加）において，本研究の成果を報告し，岐阜県下の大学生の教育支援に貢献することを予定している。研究成果を地域社会へ還元し，学生が今まで以上に支援体制を促進することに貢献できるよう大学教育関係者向けにも成果が発信できる方策を進めて行く。

**この連携型共同研究の成果に関する研究発表・報告等**

佐々木恵理・堀田亮・西尾彰泰・山本眞由美（印刷中）．大学新入生の首尾一貫感覚（SOC）と生活習慣，精神的健康度との関連　CAMPUS　HEALTH56(2)

文部科学省科学技術人材育成費補助事業
「ダイバーシティ研究環境実現イニシアティブ（連携型）」

# 平成 30 年度　連携型共同研究助成報告書（アピ株式会社用）

**研究代表者**

| | |
|---|---|
| ふりがな | もりもと　ともみ |
| 氏名 | 森本　智美 |
| 所属 | アピ株式会社　長良川リサーチセンター |
| 職名 | 主任 |
| E-mail | morimoto-tomomi@api3838.co.jp |
| 電話番号 | 058-232-0838 |

**研究課題名**

プロポリスタブレット摂取による歯周病原因菌定着抑制および口腔内環境改善に関する研究

**共同研究者名**　（氏名、所属機関、部局、職名、性別）

田中　香お里、岐阜大学大学院 連合創薬医療情報研究科
科学研究基盤センター 嫌気性菌研究分野、教授、女性

田澤　茂実、アピ株式会社、長良川リサーチセンター、課長代理、男性

**研究の目的**

プロポリスは、抗菌作用や抗炎症作用、抗酸化作用など多くの作用が報告されており、中でも口腔ケアに関する臨床研究報告は多い。我々は、これまでの連携型共同研究において、プロポリスエキスとその主成分に対する口腔内細菌の感受性および抗菌スペクトラムを評価し、口腔内細菌に対して有効な成分を明らかにした。さらに、プロポリスエキスの有効量を基に設計したトローチが、主要な歯周病原因菌である *Porphyromonas gingivalis*（以下 *P. gingivalis*）に対して抗菌活性を示すことを確認し、臨床試験実施に向けた準備を行ってきた。

そこで本研究では、岐阜大学大学院医学系研究科医学研究等倫理審査委員会の承認を得て、プロポリスエキス配合トローチの摂取による歯垢の定着抑制および口腔内歯周病原因菌数の減少を評価するための臨床試験の実施を目指した。

**目的達成度および研究の成果と課題**

昨年度は、歯科医の協力を得て、臨床試験の実施を計画し、岐阜市内での検査場所の調整、試験プロトコルの設定、アピ社員の試験協力者（被験適格者）の確保および岐阜大学医学部倫理委員会への申請準備を進めてきたが、「人を対象とする医学系研究に関する倫理指針」の改正や岐阜大学の倫理審査申請システムの電子化の過渡期にあたり、倫理委員会審査の受付が平成 30 年 4 月以降に延期となった。そこで、今年度は、本臨床試験の実施のため、倫理審査申請の準備を進めていたが、平成 30 年 4 月 1 日に施行された「臨床研究法」（平成 29 年法律第十六号）により、本臨床試験は「特定臨床研究」にあたると判断され、認定臨床研究審査委員会を設置しない方針である岐阜大学では審査できないとの連絡を受けた。以上のことから、本臨床試験の実施を一旦保留とし、今年度は、プロポリスを処理した細菌の形態変化を経時的に実体顕微鏡で観察し、抗菌作用のメカニズムの解明を目指すこととした。

歯周病原因菌の形態変化の観察には、これまでに実施した観察等で伸長抑制や形態変化が明らかであった *Actinomyces naeslundii*（初期プラーク形成に関与するグラム陽性桿菌；以下 *A. naeslundii*）を被験菌として用いた。短時間の連続的な観察によってプロポリスエキス（EEP）を処理した菌の明確な形態変化を捉えるのは難しかったが、EEP 処理 30～60 分後の観察において、細菌表層に小胞様物質の形成がみられた。これは、プロポリス未処理のコントロールではみられない事象であった。この小胞様の構造体は、細菌表層に接触しているミセル化したプロポリスか、あるいは、細菌の細胞壁から誘導されて形成された膜小胞（MV；メンブレンベシクル）のいずれかであると考えられた（図 1 矢印）。

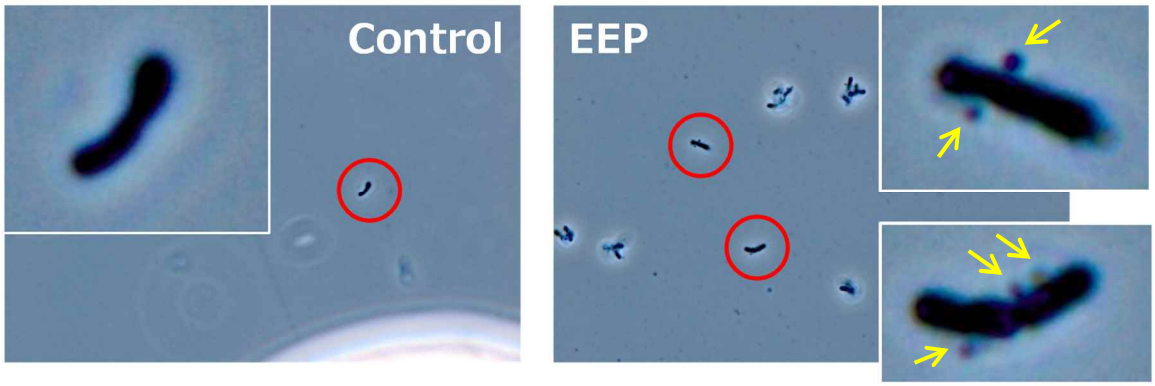



**図 1　プロポリス処理 30 分後の *A.naeslundii* の形態変化**
**左：EEP 未処理、右：EEP 処理（256 μg/mL）**

また、*A. naeslundii* を嫌気条件で 2 週間培養したところ、EEP 未処理のコントロールでは、培養期間の長さに従って細菌の伸長や分岐（V、Y、T 字状の多形性）の様子が観察され、2 週間後には糸くず様の塊（凝集塊）の形成がみられた。一方、EEP 処理した場合、*A. naeslundii* の伸長は殆どみられず、伸長がみられてもその度合いは僅かであった（図 2）。このことから、EEP は培養の早い段階で菌体の膜構造に変化（傷害）を与え、その変化は不可

逆的に持続し、殺菌的に作用していることが示唆された。

なお、予備的実験として、主要な歯周病原因菌である *P. gingivalis* を実体顕微鏡で形態観察したところ、EEP 処理により細菌数は減少したが、*A. naeslundii* でみられた様な明らかな形態変化は確認できなかった。

以上のことから、EEP は初期の付着菌を抑制することによって歯垢を減らし、歯肉炎や歯周炎の改善に役立つことが期待される。今後は、更なる EEP の作用機序の解明を目指すとともに、食品 CRO や歯学部をもつ大学等の協力を仰ぎ、ヒトでのプロポリス配合タブレットの有効性を確認していきたい。

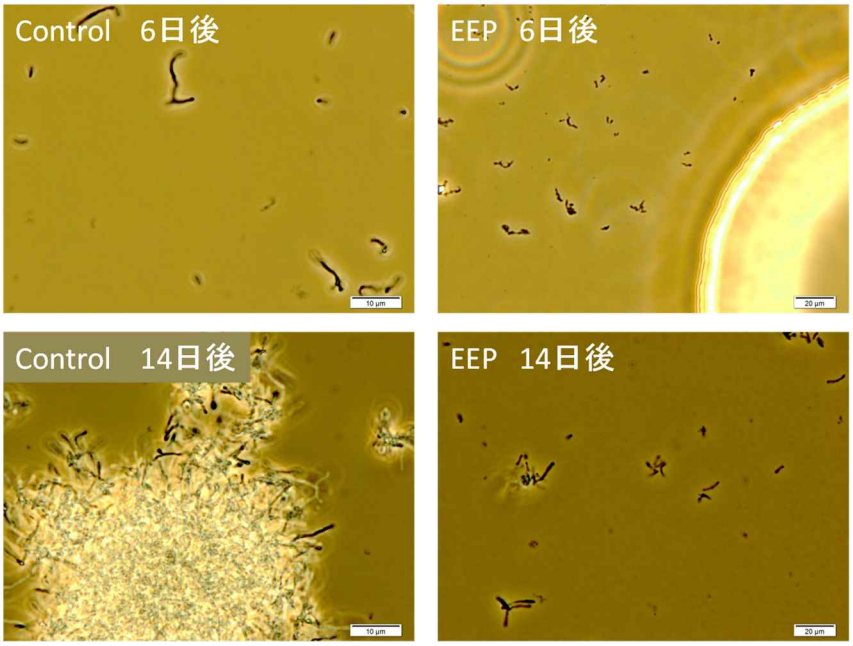



**図 2　2 週間の培養における *A. naeslundii* の伸長**
**左：EEP 未処理、右：EEP 処理（256 μg/mL）**

**共同研究をすすめるうえでの反省点**

本臨床研究が介入試験とはいえ、食品による抗歯周病試験であったことから、倫理審査委員会での承認は得られるであろうと考えていた。しかし、臨床研究法の施行と相まって、岐阜大学の倫理審査委員会での審査は不可と判断されたため、外部の民間を含めた他の試験機関での実施など、新たな筋道が立てられなかった。

**共同研究の成果のうち、特に、以下の 4 点についての達成度をそれぞれ簡潔に記述してください。**

— PI 経験への貢献度（申請者が PI として、共同研究の役割分担を適切におこない、共同

研究者を取りまとめながら、研究を実施することできたか。）

共同研究者との予定の調整や訪問、試験体制の整備、申請書類の作成、予算管理、あるいは臨床試験の保留に関し、関係各位に事情説明をするなどの取り組みを通じて PI としての貴重な経験が得られた。

— 共同研究の学術的価値（共同研究の学術的価値が高く、独創性があったかどうか。）

プロポリス抗菌作用の作用機序に関する報告が少ない中、本研究では、プロポリスエキス（EEP）を処理した細菌を経時的に観察することにより、作用機序の解明につながると考えられるエビデンスを追補することができた。

— 共同研究実施者の妥当性（若手女性研究者の研究力が向上したか。）

弊社では設備の面で取扱いが難しい嫌気性細菌を用いた研究を継続して実施することができた。また、共同研究者からの助言を得て、マイクロ流路チップ等も試行しながら、細菌を固定しないまま経時的に形態観察を実施することができた。

— 共同研究の地域貢献性（共同研究によって、地域活性化ができたか。）

岐阜県は近代養蜂発祥の地であり、現在でも養蜂関連企業が多い。蜂産品であるプロポリスの効能を科学的に証明することは、地域の活性化にも有用であると考えられる。また、最近では歯周病と全身疾患の関連性が取り上げられ、科学的な根拠に基づいた本研究における口腔ケア用タブレット（トローチ）の開発は、人々の健康の維持・増進の視点からも意義深いものと考える。

**この連携型共同研究の成果に関する研究発表・報告等**

口頭発表

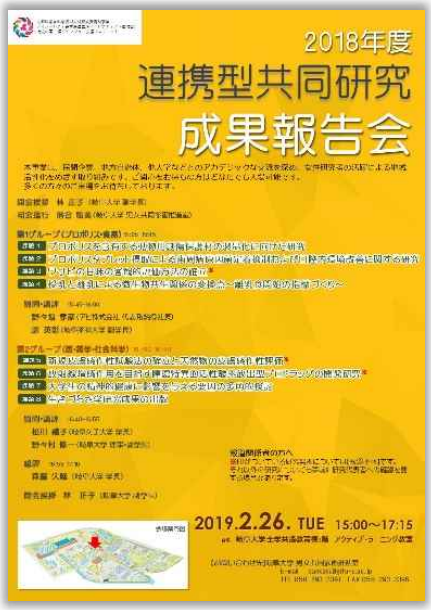
第 9 回　岐阜薬科大学機能性健康食品研究講演会「口腔内細菌に対するプロポリスの抗菌作用」森本智美、田澤茂実、田中香お里、市原賢二

**その他（特記すべき事項など）**

発表予定

第 19 回 日本抗加齢医学会（2019 年 6 月 14 日～16 日）

## 2018（平成 30）年度 連携型共同研究成果報告会




【日時】2019（平成 31）年 2 月 26 日（火）
15：00～17：15
【場所】岐阜大学全学共通教育棟 1 階
アクティブ・ラーニング教室
【参加者数】 51 名（うち女性研究者 25 名）
岐阜大学 23 名
岐阜薬科大学 11 名
岐阜女子大学 7 名
アピ株式会社 7 名
その他 3 名

【概　　要】

2018（平成 30）年度連携型共同研究成果報告会を開催し、今年度採択された 8 研究課題が研究成果を 1 課題につき 10 分間で発表した。今回は、全体を 2 グループ（第 1 グループ（プロポリス・食品）、第 2 グループ（医・薬学・社会科学））に分けて実施した。

林 正子 岐阜大学副学長（多様性人材活力推進担当・男女共同参画推進室長）の開会挨拶の後、第 1 グループの 4 名の研究代表者または共同研究者による成果発表が行われ、発表後に講評者としてアピ株式会社の野々垣孝彦代表取締役社長および岐阜薬科大学の原英彰副学長が研究成果に対してそれぞれ企業・大学の立場から講評した。また、会場からの質問に対して発表者からの返答があった。

続いて第 2 グループの 4 名の研究代表者による成果発表が行われ、講評者である岐阜女子大学の松川禮子学長および岐阜大学の野々村修一理事・副学長から分野横断的な共同研究の意義や研究開発プロセスについてそれぞれコメントがあった。

総評者である岐阜大学の森脇久隆学長からは、連携型共同研究の意義および研究成果に対する称賛を含めたコメントがなされた。

最後に実施責任者である林正子副学長より、本事業が 4 年目を迎えており、着実に成果が蓄積されてきていること、そして各研究成果のさらなる発展への期待を込めた閉会挨拶がなされた。

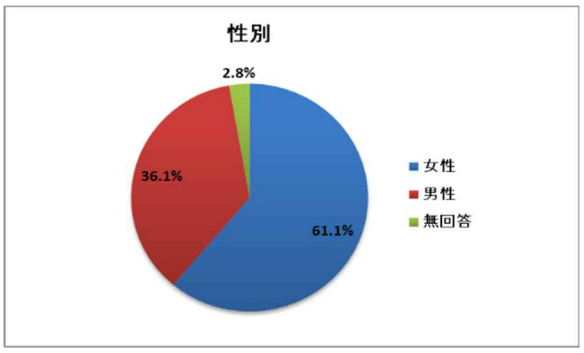
成果報告会の様子

【アンケート結果】
回答数：36 名（70%）

1. あなたについて教えてください。

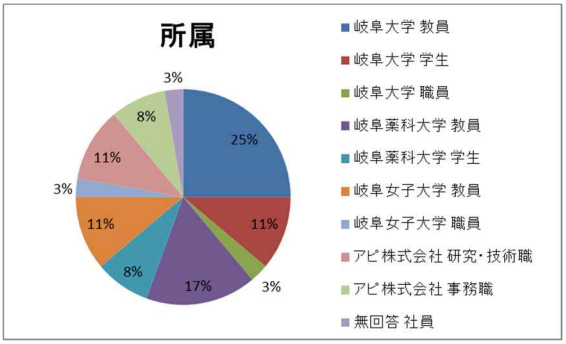
性別

| 項目 | 人数 | 構成比(%) |
|---|---|---|
| 女性 | 22 | 61.1% |
| 男性 | 13 | 36.1% |
| 無回答 | 1 | 2.8% |
| 合計 | 36 | 100.0% |



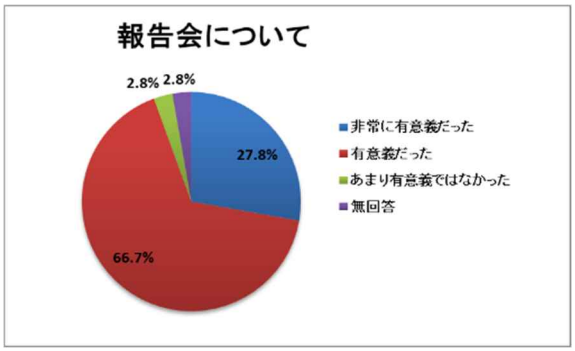

所属

| 機関 | 職位 | 人数 | 構成比(%) |
|---|---|---|---|
| 岐阜大学 | 教員 | 9 | 25.0% |
| | 学生 | 4 | 11.1% |
| | 職員 | 1 | 2.8% |
| 岐阜薬科大学 | 教員 | 6 | 16.7% |
| | 学生 | 3 | 8.3% |
| 岐阜女子大学 | 教員 | 4 | 11.1% |
| | 職員 | 1 | 2.8% |
| アピ株式会社 | 研究・技術職 | 4 | 11.1% |
| | 事務職 | 3 | 8.3% |
| 無回答 | 社員 | 1 | 2.8% |
| 合計 | | 36 | 100.0% |




2. 本報告会についてお答えください。

| 項目 | 人数 | 構成比(%) |
|---|---|---|
| 非常に有意義だった | 10 | 27.8% |
| 有意義だった | 24 | 66.7% |
| あまり有意義ではなかった | 1 | 2.8% |
| 無回答 | 1 | 2.8% |
| 合計 | 36 | 100.0% |

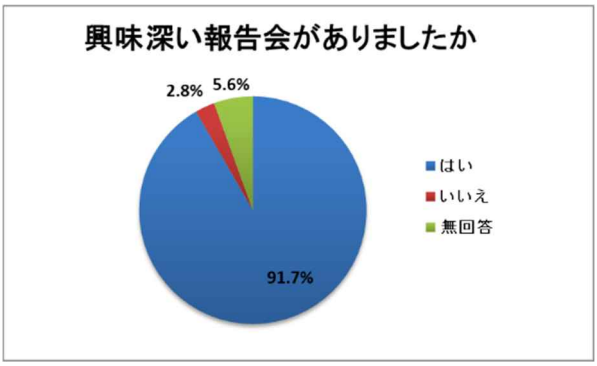


理由（一部抜粋）

- 研究発表の経年の状況を見ることができて、とても有意義だった。
- 様々な視点、分野を研究している女性研究者の方たちの話は参考になった。
- 分野の違う研究発表を聞く機会はほとんどないため、大変刺激になり勉強になった。
- 研究をどのように進められたかがよく分かり、自分の研究の進め方の参考となった。
- 理系文系にとらわれない、様々な分野の研究について聞くことができた。
- 岐阜大学がどのような共同研究を行なっているのか知ることができたため。また、面白い発想の研究を多く聞くことができ、刺激になった。
- 岐阜県内でどのような研究が進められているか知れて良かった。

3. 興味深い研究報告がありましたか。

| 項目 | 人数 | 構成比(%) |
|---|---|---|
| はい | 33 | 91.7% |
| いいえ | 1 | 2.8% |
| 無回答 | 2 | 5.6% |
| 合計 | 36 | 100.0% |




4. 今後の女性研究者の活躍のために、どのような取組が有効だと思いますか。

- 選考委員（あらゆる事についての）の男女比を 50：50 にする。
- 男女が分かる情報を伏せて選考する。
- 4 機関での研究者間の交流会などがあれば情報交換や共同研究の相談などができるかもしれない。
- 研究費支援や論文発表助成は、直接的に有効であると思う。連携型共同研究を多様な分野で展開することは、参加研究者にとって新しい発想を切り開くきっかけを与えるので有意義だと思う。
- メンター（女性研究者を指導する立場の教員）の資質向上のための研修やガイドブックの作成。
- 男女関係なく成長できる土俵作り（長時間労働がない、能力・がんばりを公平に評価できる体制）。
- ICT を活用して時間の自由度を上げる。
- 制度も大事だが、女性が働くことを日本の社会・家族・近所・会社・大学など組織が受け入れることが重要。
- 国による制度の成立。

## 2-2. 英語コミュニケーション力向上セミナー

【講　　師】斎藤 裕紀恵氏（株式会社 Y&S Visionary 代表取締役）
【日　　時】2019（平成 31）年 2 月 7 日（木）13:00～16:00
【場　　所】岐阜薬科大学本部　大学院講義室
【受講者数】23 名（うち女性研究者 7 名）
岐阜大学 3 名、岐阜薬科大学 16 名、岐阜女子大学 1 名、アピ株式会社 3 名

過去２回のセミナーで好評を博した斎藤裕紀恵氏を講師に迎え、様々なコミュニケーション術を学びながら、英語でコミュニケーションを円滑にできるようになることを目指すことを目的に開講した。また近年、英語で行われる会議も増えてきていることから、英語で行われる会議への参加の仕方、会議の進め方についても学んだ。プログラムの概要は以下のとおりである。

基礎編

How to communicate effectively「効果的にコミュニケーションをする方法」
＊Start the talk（会話を始める）
＊Show interests（興味を示す）
＊Make a small talk　（スモールトークをする）
＊Keep the talk flow（会話を続ける）
＊End the talk（会話を終える）
コミュニケーション上手へのコツ①
：Be an active listener（積極的な聞き手になる）

応用編

How to facilitate a meeting effectively「効果的に会議を進める方法」
＊Prepare a meeting（ミーティングの準備をする）
＊Start the meeting（ミーティングを始める）
＊Keep the flow of the meeting（ミーティングの流れを保つ）
＊Take the control of the meeting（ミーティングをコントロールする）
＊End the meeting appropriately（ミーティングを適切に終える）
コミュニケーション上手へのコツ②: Application to a video conference（ビデオ会議への応用）

実践編

Have a meeting to discuss “Globalization” in university「大学のグローバル化について議論するためのミーティング」

基礎編・応用編とも、定型文を学んだ後、隣同士や立ち上がって多くの人と話すという実践時間がとられた。すべての受講者が積極的に取り組んでいた。相手に質問をするということは大事なことである。相手に興味を示し、相手に話す機会を与えるということであり、円滑にコミュニケーションをとる方法のひとつである、と述べられた。

応用編の会議の進め方においても、議長（司会）やタイムキーパーを決めてグループで取り組んだ。コツとして、分からないままにせずその場で意見を述べること、簡潔に話すこと、司会者は１人一回は発言させるよう意識すること、等を示された。また、agenda（議事予定書）作成の有用性も示され、英語会議に限らず、すぐにでも活用できそうであった。

最後の実践編では、「大学／企業のグローバル化について」検討するというテーマで、会議を体験した。まず自分の意見を書き出し、グループ替えをして意見交換（会議）を行い、最初のグループに戻り意見を要約して報告する、という形式で進められた。応用編と同様に、司会者とタイムキーパーを決め、セミナーで学んだ会話の進め方（会話の始め方、つなぎ方、賛成意見や反対意見のいい方、終わらせ方）を使って会議を進めた。

最後は時間が足りなくなり、かけ足になってしまったのが残念だった。

英語での会議に参加する時、英語で意見を述べるだけではなく、今後はメッセンジャーやファシリテーターの役割を担うことも増えてくるだろう。今回はその訓練にもなった。

＜事後アンケートの集計結果より＞

実用的な表現を学べて実際に使う時間が多くあったことがよかったという感想が多かった。反対に、英語力のある人同士で会話がはずみ、周りの人がついていけなかったと感じた人がいた。一人一回は発言させるという会議の進め方を学んだが生かせなかったことは残念である。

レベルおよび開講時間をちょうどよいと回答した者がほとんどであった。また、アンケート回答者の 100%が、セミナーが役に立ったと回答し、約 95%がまた参加してみたいと回答している。

本セミナーでは、コミュニケーションの先にあるメディエーション（仲介者）になることを目指して、基本的で実用的な表現を学び、実際に口に出すことで、英語コミュニケーション力向上を図るものであった。

実用的な表現や、これまであまり習わなかった「会話の終わらせ方」の表現を多く学べたことにより、満足度は高かったと推察する。教員・研究者のみならず、学生が英語での会議への参加を想定し、将来に向けて積極的に受講してくれた。本セミナーの開講は、研究者育成支援の一環として非常に有益であったと思われる。

**【アンケート結果】**

回答数：21 名（91.3%）

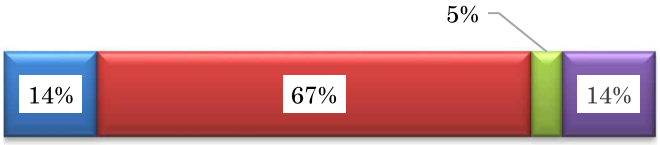
**1．あなたについて教えてください。**

**（性別）**

| 項目 | 回答数(人) |
|---|---|
| 男性 | 7 |
| 女性 | 14 |

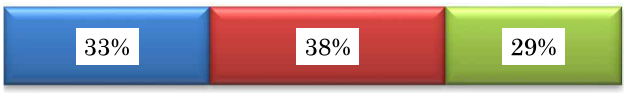
**（所属機関）**

| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| 岐阜大学 | 3 |
| 岐阜薬科大学 | 14 |
| 岐阜女子大学 | 1 |
| アピ株式会社 | 3 |




**（職位）**

| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| 教員 | 7 |
| 学生 | 8 |
| 社員・職員 | 6 |



2．本セミナーにご参加いただいた目的を教えてください。（複数回答可）

| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| ■自身の研究のため、具体的に英語でやりとりする必要があるから | 5 |
| 自身の研究対象 | 0 |
| ■学生や後輩への指導に参考に | 1 |
| ■特定の目的はないが英語力向上のため | 15 |
| ■その他 | 2 |

「■自身の研究のため、具体的に英語でやりとりする必要があるから」の具体的状況

- 大学院進学
- 協定校とのやりとり（研究ではなく業務で）
- 学会

その他

- 将来グローバルで活躍するうえで英語で会議する機会があると思ったから。
- 外国人研究員への応対のため

3．日程について

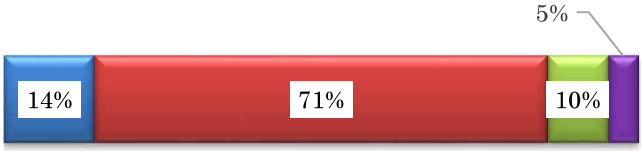
| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| ■都合の良い時期だった | 15 |
| ■別の時期だったらよかった | 2 |
| ■どちらともいえない | 4 |

a.開催時期について

- 修論、卒論前なので終わってからが良かった
- 修士論文などの提出期限がせまっているため

b.時間について

| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| ■長すぎた | 3 |
| ■ちょうどよかった | 15 |
| ■短すぎた | 2 |
| ■その他 | 1 |




4．会場について

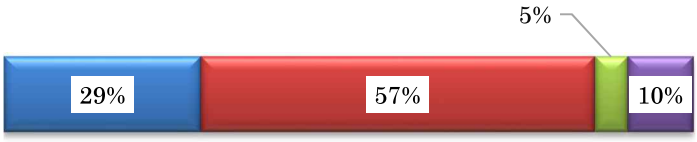
| 項目 | 回答数(人) |
|---|---|
| 狭い | 0 |
| ■ちょうどよい | 21 |
| 広い | 0 |
| どちらともいえない | 0 |

5．人数について

| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| 多い | 0 |
| ■ちょうどよい | 21 |
| 少ない | 0 |
| どちらともいえない | 0 |

6．レベルについて

| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| ■難しい | 6 |
| ■ちょうどよい | 12 |
| ■簡単 | 1 |
| ■どちらともいえない | 2 |



7．本日のセミナーでよかった点をあげてください。

- 実践的内容にとりくめて良かった。
- 話す活動が多いのはとてもいいです。もっと話したいくらいでした。
- 簡単な基礎から徐々に難易度が上がることで、上達が実感できた点。
- 会議の終わり方について学ぶことができたのがよかった。
- 英語のスキルももちろんですが、欧米の文化や考え方、ビジネスとしての会議やメールの方法も知ることができてよかった。他大学の色んな人とコミュニケーションできたこともとても楽しかった。
- 実用的でよかった
- 実践編の時間があったこと。
- 実際に英語を話す機会が多くいただけ、だんだん英語脳になってきました。
- 英語でのミーティングは難しかったが、流れを感じとることができ、役に立った。
- 英語コミュニケーションで必要なフレーズなどを知れたこと。
- シーンを問わず使える英語だったこと。
- 講義を聞くだけではなく、実際に英語でコミュニケーションをしたことがよかった。
- 学生だけでなく社会人の方もいらっしゃったので、真剣に取りくむことができた。
- 活発にコミュニケーションができて、とても楽しかったです。ありがとうございました。
- 実際に話す機会がたくさんあった点
- 自分の英語力を把握することができた。
- 実践的な内容が良かった
- 英語でのコミュニケーションについてくわしく学ぶことができた。
- コミュニケーションのノウハウを順序だてて教えて頂き有難かった。
- 積極的に話さなければいけない状況でうまくできなくても話そうと思えたこと。意見の聞き方を学べたこと。
- 使えそうな表現が多かった

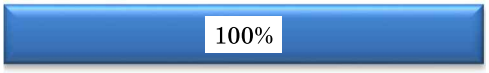
8．本日セミナーでよくなかった点をあげてください。

- 内容を十分かみしめる時間がほしかったです。大学と企業だと、少し目的が異なるかもと思いました。
- グローバル人材になるためのミーティングで、英語がすごく話せる人同士で会話が弾んでしまってついていけなかった。
- 英語の能力に差があって、ついていけない場面があって申し訳なかった。
- もっと長い時間でやって欲しかった。
- 時間に追われ、終盤かけ足になったことが残念でした。

- 少し長く感じました。
- やはり少し日本語を使ってしまった点
- 実践編のテーマが適切ではなかったと思う。もう少し取り組みやすい内容だと良かった。

9．本日のセミナーは役に立ちましたか。

| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| ■役立った（将来役に立つと思う） | 21 |
| 役に立たなかった（役に立たないと思う） | 0 |
| 分からない | 0 |

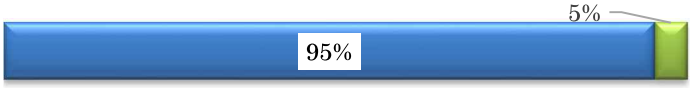



１０．　9. でそのように答えた理由を教えてください。

- 様々な人と英語でコミュニケーションする方法を学べたため。
- 研究ではなく業務でも使える表現がありました。
- 会議のやり方がわかった。特に agenda を用意するのは、あまり日本ではないと思ったので、新しい知識として蓄積できた。
- 今は具体的にはうかばないが、いつかどこかで色んなかたちで役立つと思う。
- 直接的な言い方になってしまいそうだが、やわらかい表現を使うことが大事と気付けたこと。（日本語なら当たり前にできているのに。）
- 会議の進め方など、実践的な内容だったから。
- 話の切り上げ方を学んだのは初めてだったので、今後も活用していきたい。
- 英語コミュニケーションで必要なフレーズなどを知れたこと。
- シーン問わず使える英語だったこと。
- 丁寧な表現を学べたので、今後活かせると思った。
- 具体的なフレーズをたくさん教えていただけたから。
- 言い回しなどをたくさん得ることができたから。
- 他の人の意見を要約して英語で伝えるのが難しく、自分の現在の英語力を客観的に判断することができた。
- 自分が所属している研究室に海外から研究者が来るため。
- 英語だけではなく、日本語でのコミュニケーションの役に立つと感じたから。
- 今後、国際会議等におけるネイティブの方とのお話に役立つと感じた。
- 会議をする機会があるかどうかわからないが、進め方や話の終え方を学べたから。
- 使える表現があった。

１１．今後もこのようなセミナーに参加したいと思いますか。

| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| 参加したい | 20 |
| 参加したくない | 0 |
| 分からない | 1 |




１２．今後、英語関連のセミナーを開催する場合、どのようなセミナーがあったら参加してみたいと思われますか。また、次回セミナーについてご要望等ありましたらお書きください。

- 英語論文の書き方（2）
- プレゼンテーション（5）
- 英語を利用したプレゼン技法について教えて頂きたい
- 以前に英語ネイティブの先生が全て英語で行ったセミナーがありました。そのようなものもまた企画していただけると嬉しいです。
- 英語を話す機会を得たいので、ディベートやプレゼンテーションを練習したい。
- 英語ディベート法
- もう少しレベルの下げた英語コミュニケーション
- ビジネス英語
- 海外での買い物の仕方（旅行の時にあまり現地人と会話できなかったから）
- 会話

１３．その他本日の感想やご意見、今後行ってほしい企画などありましたら、ご自由にお書きください。

- 多くの方々と話せるように講義を組んでくださったおかげで、打ち解けたコミュニケーションがとれたと思います。
- 楽しく勉強になりました。先生にも、アレンジして下さった先生方、スタッフの皆様に感謝いたします。ありがとうございました。
- 大変楽しく過ごせました。
- とてもためになりました。ありがとうございました。

## 英文校閲費用助成

2018（平成 30）年度も岐阜大学で 2 件、岐阜薬科大学で 7 件の英文校閲費用助成が実施された。

## 2-3. 研究倫理研修

研究倫理研修１

【演題】人はなぜ、不正をしてしまうのか　－研究・事業活動を通して－
【講師】小林 雅典 氏
（岐阜大学 研究推進・社会連携機構研究推進本部特任教授（プログラム・オフィサー））
【日時】平成 30 年 9 月 13 日（木）15：00～16：00
【場所】岐阜女子大学 本館 3 階 大会議室
【参加者数】64 名（うち女性研究者　35 名）
岐阜大学 1 名　岐阜薬科大学 1 名　岐阜女子大学 62 名

研究者の研究倫理の向上を目的として研究倫理研修を開催した。

講師の小林雅典先生は、塩野義製薬株式会社において、ワクチン開発研究、抗ウイルス薬開発研究に長年従事された後、現在、岐阜大学の研究推進・社会連携機構において、研究者の研究推進支援をされている。

最初に研究活動上の不正行為の現状について、各種のデータに基づき説明いただいた。

「人はなぜ、不正をしてしまうのか」

組織犯罪研究者ドナルド・R・クレッシーの不正のトライアングル、動機・プレシャー、機会の認識、姿勢・正当化の３つの要因が揃ったときに人は不正をしてしまうのではないか。

研究不正を防ぐには、その要因のどこかを無くす必要があり、研究倫理教育、不適切な研究行為を防ぐこと、風通しの良い研究室の運営が必要ではないかと述べられた。

多くのデータを示しながら、分かりやすく、人はなぜ、不正をしてしまうのか、そして、研究不正を防ぐにはどのようにしたら良いかお話しいただき、大変有意義な研修となった。

【アンケート結果】

回答者数：50 名（回収率：78%）

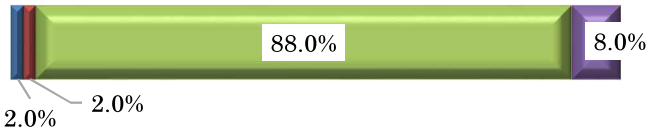
1. あなたについて教えてください。

（性別）

| 項目 | 回答数(人) |
|---|---|
| 女性 | 33 |
| 男性 | 17 |

（所属）

| 項目 | 回答数(人) |
|---|---|
| 岐阜大学 教員 | 1 |
| 岐阜薬科大学 職員 | 1 |
| 岐阜女子大学 教員 | 44 |
| 岐阜女子大学 職員 | 4 |




2. 本日の研究倫理研修についてお答え下さい。

| 項目 | 回答数(人) |
|---|---|
| 非常に有意義だった | 19 |
| 有意義だった | 29 |
| あまり有意義ではなかった | 1 |
| 無回答 | 1 |

3. 2. のお答えについて理由を教えてください。（自由記述）

- 研究における不正行為について考えることができた。
- 多くの根拠をもとに、とてもわかりやすかったです。
- いろんな事例を聞くことができたので（研究者の疑惑、企業の不正 etc）非常にわかりやすかった。答えが無い問いですが、考えていく、とりくんで行くことが重要だと改めて認識した。
- 知っている内容も含まれていたため。
- 不正はいけないということはわかっていることだが、「なぜ」という視点でみるのは面白く、考えさせられる部分が多かった。
- 現実的で理解しやすい話だった。おもしろい。

- このような研究倫理に関する講習を聞きたかったのでありがたいと思った。
- 要因についての整理が明解であった。
- 具体的で深い内容だったから。
- とてもわかりやすかった。
- 科研費等の事務担当であるから。
- なぜ不正がおきるのか根本的なところから話を具体的にされ、おきにくい状況をまわりの者がつくっていくことの大切さを学ぶことができたから。
- ”なぜ”という根本から研究不正をとらえることができたため。
- 多くの事例、統計データが優れている。
- 改ざんの裏にある心理について感じていたことばを文字で見ることで、生じてしまうことはしょうがない、しかし、それを公にするのも難しいと思った。
- 今後意識して取り組みたいと思いました。一員として風通し良い職場づくりに貢献したいと思います。
- 不正に関してデータに基づいて説明されていたのでなっとくした。
- 具体例をお示しいただき大変興味をもちました。
- 不正について倫理的に、且つ具体的事例を挙げた説明であり、分かり易い内容であった。
- 人が不正をしてしまう背景には自身だけでなく、組織の環境など様々なことが関係していることが分かり、全体での情報の共有の大切さが分かったため。
- とてもわかりやすく、丁寧な（お話）説明であった。人間の可能性を上手く活かせるにはどうしたらよいか考え続けたい。
- 不正のメカニズムについて、わかりやすい説明があった。
- パワーポイントの文字がスライドによって見えない（文字が小さくて）のが残念でした。

**4. 今回のリーダーシップ研修の開催をどのように知りましたか。（複数回答可）**

| 項目 | 回答数(人) |
|---|---|
| 岐阜女子大学からの案内 | 48 |
| ポスター等の掲示物 | 2 |
| e メール | 2 |
| 関係者から聞いた | 2 |
| プロジェクト通信 | 0 |
| ホームページ | 1 |
| その他 | 0 |
| 無回答 | 0 |

5. 今後もこのような催しに参加したいと思いますか。

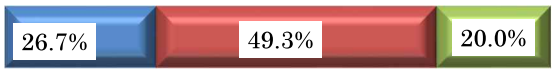
| 項目 | 回答数(人) |
|---|---|
| ■参加したい | 29 |
| ■テーマによっては参加したい | 21 |
| ■参加したくない | 0 |
| ■無回答 | 0 |

「テーマによっては参加したい」と答えられた方はどのようなテーマであれば参加したいとお考えですか。＊その他の回答を選択された方も、興味深い催しのアイディアがございましたらお書き込みください。

（記述無し）

6. 今後、どのような人の話を聞きたいですか。（複数回答可）

| 項目 | 回答数(人) |
|---|---|
| ■大学関係者 | 20 |
| ■企業関係者 | 37 |
| ■行政関係者 | 15 |
| ■その他 | 0 |
| ■無回答 | 3 |




7. 具体的に話を聞きたい人がいれば、名前を書いてください。

・　人文科学分野の先生のお話しもお聞きしたい。

8. その他、感想やご意見、今後行ってほしい企画など、ご自由にお書きください。

・　Very interesting. Thank you.

・　不正を不正と認めること、認められる環境をつくることは、人間として、簡単だけど簡単ではないと思った。組織にいる以上、何が正当か、何を持って正当とするか、権力も関与してくる為難しいと思った。

研究倫理研修２

【演題】科学に携わる者のための倫理～技術者倫理教育の視点から～
【講師】片倉 啓雄 氏（関西大学 化学生命工学部 教授）
【日時】2018（平成 30）年 9 月 19 日（水） 13：30～14：45
【場所】アピ株式会社 長良川リサーチセンター 2 階 大会議室
【参加者数】49 名（うち女性研究者 14 名）
岐阜大学 1 名、岐阜薬科大学 2 名　岐阜女子大学 2 名、アピ株式会社 44 名

片倉先生は自身の自己紹介も兼ね、大阪大学卒業後企業(オリエンタル酵母工業(株)中央研究所)での研究に携わっていた経験を交えながら、技術者倫理について講演された。

① なぜ事故・不祥事が絶えないのか？
② 研究・開発と安心・安全
③ 予防倫理から志向倫理へ
④ Well-being と研究・開発　の 4 点について講演。

具体的な例を挙げながら説明があった。誰もが持つはずの良心がなぜ働かないのか？自分の価値観が、世の中の標準であると信じているところに不祥事が起こるのではないかと指摘された。技術者にはユーザーの信頼に応える責務があると訴えられた。

また、技術者は安全性を講じる義務がある。どのような技術にも不確定な要因がある。経済性、利便性、安全性は互いに相反する。そこで、その実務に携わる技術者は経済性、利便性、安全性のより良いバランスを取らなければならないと指南された。

引き続き、法律とルールと研究・開発の関係について、過去に起きた事故・不祥事をもとに紹介し研究不正の当事者にならないようにするには、損得で判断しないと教示された。

最後に、耐震工事により新潟県中越地震でも上越新幹線が脱線に留まり死者が出なかった事例、歴史的背景から高地に建造したことで津波を免れた女川原発の事例が紹介された。非常に有意義で興味深く、感動した研修会であった。

【アンケート結果】

回答数：49 名（100%）※一部の設問にて無回答あり

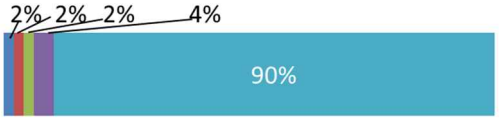
1．　あなたについて教えてください。

性別

| 項目 | 回答数(人) | 割合 |
|---|---|---|
| 男性 | 29 | 59% |
| 女性 | 19 | 39% |
| 無回答 | 1 | 2% |

所属

| 項目 | 回答数(人) |
|---|---|
| 岐阜大学(教員) | 1 |
| 岐阜薬科大学(経営委員会) | 1 |
| 岐阜薬科大学(職員) | 1 |
| 岐阜女子大学(教員) | 2 |
| アピ(株) | 44 |




2．本日の研究倫理研修についてお答えください。

| 項目 | 回答数(人) |
|---|---|
| 非常に有意義だった | 21 |
| 有意義だった | 26 |
| あまり有意義ではなかった | 0 |
| 有意義ではなかった | 0 |
| 無回答 | 2 |

理由

- 倫理意識の大切さについてわかりやすく学べた。
- 組織内の標準化が気づかないうちに起っていること、いつの間にか世間からズレていることに気づかされた。ルールを守った上で、より研究者として良い方向に行けるように考えていきたい。
- 失敗例はニュースで見ることができるが、成功例はめったに報道されない。今回のご講演で成功例をうかがえ、研究倫理が理解できた。
- well-being を構成する 5 つの要素や幸せを感じる時など、仕事をする上で参考になる情報が得られたため。
- 実例をまじえながらの講演で、なるほどと思うことが多くあった。明快な解説で大変分かりやすかった。
- 気づかないうちに逸脱した状態になっていること、第 3 者の意見をもつことが非常に

重要と分かった。ゆでがえるになっているかも…と思いながら、普段の生活、業務を見直したい。

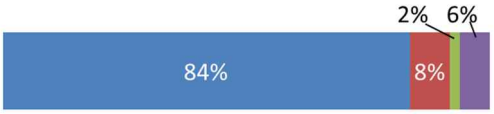
- 不正が発生する時の背景、仕組み、環境等を理論付けて解説にいただいたことが今までなかったため。
- 無意識にしていた行為について、改めて考えさせられ、自覚する大切さに気付かされました。
- 研究倫理の考え方について、頭の中を整理することができた。
- 自分の研究を振り返ると、特に統計などは今までのこの手法でやってきたからという理由で選択してしまっていることが多いように思います。しかし、その手法で結論に影響を与えてしますことも多いと思うので、考えさせられました。また、脱慣習レベルでの倫理意識を持つことは大事だと思いました。
- 女川原発の例が素晴らしい話でした。
- 幸せの追及が倫理につながるという考え方が新しく考えさせられました。
- 逸脱の標準化、「ゆでがえる」という考えは、特に注意が必要であり、第３者の目の大切さを改めて感じた。

３．本研修を通じて、不正をせずルールを遵守することの大切さを学べましたか。

| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| はい | 47 |
| いいえ | 0 |
| 無回答 | 2 |

４．今後もこのような催しに参加したいと思いますか。

| 項目 | 回答数（人） |
|---|---|
| 参加したい | 41 |
| テーマによっては参加したい | 4 |
| 参加したくない | 1 |
| 無回答 | 3 |




５．その他、感想やご意見、今後行ってほしい企画など、ご自由にお書きください。

- サポイン、ＡＭＥＤの基盤研究、アカデミアの橋渡し研究の発表会。
- 女性の技術者としてのステップアップ。
- 働きやすい環境づくり（女性にとって）。
- 研究者の不正の防止について、どのような対策が必要か、できるか等の話。
- 生産性の向上。

## 2-4. 夏季休暇中の学童保育トライアル「カモミールこども大学」

小学生の子どもを持つ女性研究者にとって、長期休暇中の子どもの過ごし方は頭を悩ませる大きな問題である。本事業の一環として、今年度も引き続き夏季休暇中の学童保育トライアル「カモミールこども大学」実施した。なお、従来から岐阜大学で実施していた夏季休暇中の学童イベントを本プログラムに組み入れるかたちで実施した。

2018（平成 30）年度は、募集定員 25 名に対して 42 名から応募があり、抽選を実施した。体調不良により当日 1 名の欠席者が出たため、2 日間ともに 24 名（男女 12 名ずつ）が参加した。参加者には低・中学年の児童が多かったが、岐阜大学図書館での探検ツアー、岐阜薬科大学薬草園での体験型授業、岐阜女子大学生による動くおもちゃ作り、アピ株式会社のみつばち講座など高学年も楽しめる教育プログラムであったことから、保護者および参加児童の双方から高い評価を得た（アンケート参照）。

プログラム策定にあたっては、実施機関（4 機関）がそれぞれの特性を活かしたプログラムを提供し、2 日間を通して充実した内容のプログラムを児童に対して提供することができた。また、4 機関の教職員（連携協議会メンバーを含む）が担当プログラム以外の時間帯にもスタッフとして参加したことで、低学年の児童が多いなかで 2 日間にわたって 24 名の児童全員の安全を確保しながらプログラムを遂行することができた。

【日時】2018（平成 30）年 8 月 23 日（木）～24 日（金）　8：15～17:30

【場所】岐阜大学、岐阜薬科大学薬草園

【参加者数】24 名（申込者数：42 名　※定員超過により抽選を実施）※体調不良のため 1 名欠席

8月23日（木）

| 時間 | 内容 | 場所 | 担当、備考 |
|---|---|---|---|
| 8:15～8:40 | 受付 | 第6集会室 | 男女共同参画推進室 |
| 8:45～9:00 | 挨拶、本日の説明、注意事項 | 第6集会室 | 男女共同参画推進室 |
| 9:00～12:00 | 動くおもちゃ作り | 第6集会室 | 岐阜女子大学 |
| 12:00～13:00 | 昼食 | 生協食堂（大学会館1階） | 男女共同参画推進室 |
| 13:00～16:00 | みつばち講座 | 第6集会室 | アピ株式会社 |
| 16:00～17:00 | 図書館探検ツアー | 岐阜大学図書館 | 図書館学術情報課 |
| 17:00～17:30 | 解散・お迎え | 第6集会室 | 男女共同参画推進室 |
| 17:30 | 閉室 | 第6集会室 | 男女共同参画推進室 |

8月24日（金）

| 時間 | 内容 | 場所 | 担当 |
|---|---|---|---|
| 8:15～8:40 | 受付 | 第6集会室 | 男女共同参画推進室 |
| 8:45～9:00 | 本日の説明、注意事項 | 第6集会室 | 男女共同参画推進室 |
| 9:00～9:30 | バスで薬草園へ移動 | 岐阜大学 → 薬草園 | 男女共同参画推進室 |
| 9:30～11:30 | 薬草園の見学・体験 | 岐阜薬科大学・薬草園 | 岐阜薬科大学 |
| 11:30～12:00 | 移動 | 薬草園 → 岐阜大学 | 男女共同参画推進室 |
| 12:00～13:00 | 昼食 | 生協食堂（大学会館1階） | 男女共同参画推進室 |
| 13:00～16:45 | マーブルタウン（職業体験） | 第6集会室 | 岐大祭実行委員会有志 |
| 16:45～17:00 | 閉校式、集合写真 | 第6集会室 | 男女共同参画推進室 |
| 17:00～17:30 | 解散・お迎え | 第6集会室 | 男女共同参画推進室 |
| 17:30 | 閉室 | 第6集会室 | 男女共同参画推進室 |

【アンケート結果（保護者)】
アンケート回答数：18 名（女性 11 名・男性 7 名）　回収率 82%

1.属性

職種

| 職　種 | 全　体 | | 女性 | | 男性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 合　計 | 18　名 | 100.0% | 11　名 | 100.0% | 7　名 | 100.0% |
| 教育･研究職員 | 10　名 | 55.6% | 5　名 | 45.5% | 5　名 | 71.4% |
| 教育･研究職員以外 | 6　名 | 33.3% | 5　名 | 45.5% | 1　名 | 14.3% |
| 無回答 | 2　名 | 11.1% | 1　名 | 9.1% | 1　名 | 14.3% |

居住地

岐阜市小学校区内分布

| | | |
|---|---|---|
| 合計 | 18　名 | 100% |
| 岐阜市 | 13　名 | 72.2% |
| 大垣市 | 1　名 | 5.6% |
| 瑞穂市 | 1　名 | 5.6% |
| 北方町 | 1　名 | 5.6% |
| 羽島郡 | 1　名 | 5.6% |
| 四日市市 | 1　名 | 5.6% |

2. 小学校が長期の休みのとき、主として子どもの面倒をみるのはどなたですか。（複数回答有）

| 項目 | 全 体 | | 女性 | | 男性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 合 計 | 21 名 | 100.0% | 13 名 | 100.0% | 8 名 | 100.0% |
| ご自身か配偶者がみている | 7 名 | 33.3% | 2 名 | 15.4% | 5 名 | 62.5% |
| ご自身や配偶者の親、親戚にみてもらう | 4 名 | 19.0% | 4 名 | 30.8% | 0 名 | 0.0% |
| その他※ | 10 名 | 47.6% | 7 名 | 53.8% | 3 名 | 37.5% |

※学童（3 名）、民間学童（3 名）、留守番（2 名）、NPO 法人、塾、図書館、ドリームシアター、低学年の時は友達同士で順番にみた。

3.子どもが学校の授業のとき、放課後児童クラブを利用していますか。

| 項目 | 全 体 | | 女性 | | 男性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 合 計 | 18 名 | 100.0% | 11 名 | 100.0% | 7 名 | 100.0% |
| 利用している | 6 名 | 33.3% | 5 名 | 45.5% | 1 名 | 14.3% |
| 利用したいが利用できない | 2 名 | 11.1% | 1 名 | 9.1% | 1 名 | 14.3% |
| 利用する必要がない | 10 名 | 55.6% | 5 名 | 45.5% | 5 名 | 71.4% |

4.夏休み期間だけでも、子どもを職場、あるいはその近くで預かることについてどう思いますか。

| 項目 | 全 体 | | 女性 | | 男性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 合 計 | 18 名 | 100.0% | 11 名 | 100.0% | 7 名 | 100.0% |
| ぜひやってほしい | 12 名 | 66.7% | 9 名 | 81.8% | 3 名 | 42.9% |
| 興味はある | 5 名 | 27.8% | 1 名 | 9.1% | 4 名 | 57.1% |
| あまり興味はない | 0 名 | 0.0% | 0 名 | 0.0% | 0 名 | 0.0% |
| 必要ない | 1 名 | 5.6% | 1 名 | 9.1% | 0 名 | 0.0% |

5.期間はどれくらいを希望しますか？

| 項目 | 全 体 | | 女性 | | 男性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 合 計 | 18 名 | 100.0% | 11 名 | 100.0% | 7 名 | 100.0% |
| ２－３日で十分 | 3 名 | 16.7% | 2 名 | 18.2% | 1 名 | 14.3% |
| １週間 | 5 名 | 27.8% | 2 名 | 18.2% | 3 名 | 42.9% |
| ２週間 | 1 名 | 5.6% | 1 名 | 9.1% | 0 名 | 0.0% |
| ３週間 | 2 名 | 11.1% | 1 名 | 9.1% | 1 名 | 14.3% |
| １ヶ月 | 1 名 | 5.6% | 1 名 | 9.1% | 0 名 | 0.0% |
| 夏休み全期間 | 6 名 | 33.3% | 4 名 | 36.4% | 2 名 | 28.6% |

6.期間が１週間の場合、費用はどの程度なら支払い可能ですか？

| 金　額 | 全　体 | | 女性 | | 男性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 合　計 | 18 名 | 100.0% | 11 名 | 100.0% | 7 名 | 100.0% |
| 10,000 円 | 17 名 | 94.4% | 10 名 | 90.9% | 7 名 | 100.0% |
| 20,000 円 | 0 名 | 0.0% | 0 名 | 0.0% | 0 名 | 0.0% |
| 30,000 円 | 0 名 | 0.0% | 0 名 | 0.0% | 0 名 | 0.0% |
| 40,000 円 | 0 名 | 0.0% | 0 名 | 0.0% | 0 名 | 0.0% |
| 50,000 円 | 0 名 | 0.0% | 0 名 | 0.0% | 0 名 | 0.0% |
| その他※ | 1 名 | 5.6% | 1 名 | 9.1% | 0 名 | 0.0% |

※「どれもありえない」

7.4 の期間中に開催するとしたら、どのようなプログラムを期待しますか？（複数回答有）

| 項目 | 全　体 | | 女性 | | 男性 | |
|---|---|---|---|---|---|---|
| 合　計 | 43 名 | 100% | 26 名 | 100% | 17 名 | 100% |
| イベント系（遊び・ｽﾎﾟｰﾂ） | 15 名 | 34.9% | 9 名 | 34.6% | 6 名 | 35.3% |
| イベント系（学び） | 15 名 | 34.9% | 9 名 | 34.6% | 6 名 | 35.3% |
| 宿題の世話 | 8 名 | 18.6% | 5 名 | 19.2% | 3 名 | 17.6% |
| 託児（子どもの預り業務） | 2 名 | 4.7% | 1 名 | 3.8% | 1 名 | 5.9% |
| その他※ | 3 名 | 7.0% | 2 名 | 7.7% | 1 名 | 5.9% |

※楽しめると良い。大学ならではのものが良い。

生活リズムを崩さないために、学校の時間割のような区切りのある時間設定で預かってもらえると助かる。（長期間預りの場合）例：50 分何かする（宿題、読書、日記、その他やりたいことをする）、10 分休憩（この時間は自由に動いて OK。おしゃべり OK。）午前だけでも勉強タイムがあると、学校が始まっても大変じゃないかなと思う。

宿題のお世話（やる場所の提供だけでよい）。

クッキング、実験"

8.「学童保育トライアル」の感想について、自由にご記入ください。

- 充実したプログラムで、持ち帰るもの（ハチミツ、工作）まであって、子どもがとても喜んでいた。実施期間を長くしていただけるようなら、例えば、自分の専門領域に関わるこども向けプログラムを用意・実施することなども可能かと思うので、ぜひ期間拡大を検討していただきたくお願い申し上げます。
- ありがたいし、来年も参加できるとよい。
- いろいろな体験ができ、子供は大変喜んでいる。昼食は学食でなく、カレーなどみんなで作って食べれると子供たちも楽しいかと思う。来年もよろしくお願いします。
- 子供がとても楽しんでいた。ありがとうございました。
- 昨年に続き、2 回目の参加です。託児だけでは子供がおもしろくないらしく（昨年はこれが多かった）参加型のイベントが楽しいらしく、親も息抜きできるのでありがたい。

追加のお茶は麦茶にしてください。カフェインなし希望。はちみつ作業は、昨年は全員できたが今年はグループ年長者だけで、とても残念がってた。

- もう少しお迎えの時間を遅くしてもらえると助かる。(就業時間があるので少し難しい)
- いつもの生活では体験できないはちみつ作り、工作ができて楽しかったと子供が言っている。家にいたらできないことをやれたのは、子供にとって大きいと思う。朝早くから夕方まで預かっていただけたので、仕事に集中しやすく、子供のいない職員と同じ働き方ができるのでありがたい。
- とても楽しんでいた。また、来年も参加させたい。
- 普段できないことが体験できて喜んでいた。はちみつの体験は、なかなかできる機会がないので良かった。夏休みの宿題の絵日記に書いていた。透明のケースで、はちみつが台風みたいだったと言っていた。
- "初めは全く知らないお友達の輪の中に入れるか不安がっていたが、仲良しの友達もできて楽しかったよう。
- はちみつの授業は、なかなかする機会がないので珍しくて、家に帰ってからもずっと説明してくれた。またチャレンジしたいそう。
- 学食も量は多かったけど美味しかったと言っていた。民間学童は弁当持参なので、その点も大変ありがたかった。また参加できるといいなと思う。(人数制限があるので難しいかもしれないが…)
- 高学年の子どもでも興味深く過ごせたようで、楽しそうに今日やったことについて教えてくれた。(はちみつのふたを取る作業が高学年だけで、自分がやれた事が嬉しかったよう)とても良い経験をさせていただき、ありがとうございました。
- とても楽しかったようで、体験してきたことについて目をキラキラさせて話していた。子供に良い経験をさせていただき、ありがとうございました。
- 子供が非常に楽しかったと感想を言ってくれた。どうもありがとうございました。
- 娘はとても楽しかったよう。預けられる経験が初めてだったので、少し成長したように思えた。
- 普段なかなか体験できないことを体験できたので、とても喜んでいた。まだ小さいし、1人で参加だったので心配だったが、大丈夫だったよう。貴重な体験ができて、子供自身も少し成長できたのではないかと思った。
- 課程や学校では体験できない内容で、良い経験ができると思い応募した。初めて会う参加者、先生、学生さんの中で過ごすのも良い経験だったようで、1日目を終えて今日したことをいろいろ話してくれた。正直、長い休みは、子供と向き合う時間が長いので、2日間でも学童保育をしていただけて親としては良い休息ができた。ありがとうございました。
- とても助かった。お昼の心配をしなくてもいいということもあり、職場内ということで安心して仕事することができた。子供も最初は不安がっていたが、新しいお友達もできて家に帰ってからも楽しかったとたくさん話をしてくれた。

**8.職場が実施する小学生の子育て支援について、ご意見がありましたら自由にご記入ください。(制度改善の希望、職場の雰囲気、あったらいいと思う支援、実施してほしいイベントなど)**

- 放課後児童クラブが小３までしかないので、ぜひ長期休暇中の学童をお願いしたい。センター試験など、土日（休日）にかかる業務の時の預り制度があると助かる。
- 私は４年前に時短をとらせていただいた。今よりとりやすく、非常にありがたかった。職場の雰囲気も良い。その時を乗り越えられたから、いま還元しようと思い働いている。
- 実施してほしいイベント：獣医学部の見学（オープンキャンパスではない）
- 小学生は中高学年になると下校が遅いので、平日の支援はいらない。夏休みに勉強になるような、もの作りなどあればいい。家ではできないようなものが望ましい。例えば、メタルクラフト（工学部の協力のもとで)、動物病院の見学、ジャム作り。
- 大学生がやっている部活、大学祭の準備の見学、ちょこっとだけ参加かせてもらえると、大学がどんなところなのか見れていいかなと思う。
- 大学生が受けている講義で、子供でも分かる題材を分かりやすく講義してもらうのもいいかなと
- 土日に全学的な出勤があり、その時に託児ができると助かる。
- 科学館などでなされている、小さい子でも分かりやすい実験。
- 今回のような長期夏休み期間に学童があると助かる。
- "体験イベント
- 休み中、親の負担の多い一研究の相談。少し手伝っていただけると非常に助かる。
- "職場には子育て支援が特にないので、長期休みの時の預かり保育があると助かる。
- 今回は職場から少し遠かったので、預けに行くのが少し大変だった。
- 同じ職場の子供さんたちが交流できる機会があることは、とても良いと思った。２日間お世話になりました。ありがとうございました。

## 2-5.　メンター制度

今年度も各機関でメンター制度を継続して実施した。岐阜大学では、複数の女性研究者から教育・研究と育児との両立に関する相談が寄せられ、メンター（先輩研究者）を紹介したほか学内で利用できる制度等の情報提供を行った。